ACRYLART

アクリラート別冊2008



The Scholar 20 Perspective

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊 2008

holbein

ごあいさつ

第21回ホルベイン・スカラシップ奨学者の作品集をお届けいたします。ここでご紹介する作家もそうですが、アーチストというのは自身の目で見た世界の有り様をその作品に反映させています。作家の数だけ違う目があり、鑑賞する私たちは、自分では見えない、しかし確かに存在する世界の実相を他者による作品群を通じて伺い知ることができるのです。見る側の状態によって世界が変わる、という考え方は、実は事物の状態は観測によって決定されるという、最新の物理学である量子力学の立場とも一致しています。誰かが「見た」瞬間だけモノはそこに「存在」し、見る側の状態によってモノの状態も違うというのです。ならば、作家によって見える世界が違う、とのレトリックは科学的にも根拠があり、見られることによって作品が初めて作品として存在し得るのもまた事実です。観測された世界の表象として生まれた作品はやがて、他者の観測する世界の一部として機能することになります。この際限のない「見るもの」と「見られるもの」との循環によって、人類は果てしない世界の拡がりと奥行きを認識するに至り、叡智あふれる豊かな社会を築き上げることができたのでしょう。

さて、量子物理学の方法では、確率論的に一見バラバラな観測結果を集積することによって全体の実像を浮かび上がらせます。この冊子の奨学者たちひとりひとりは表現も素材もさまざまですが、20名分の個性を合わせて読みとってみれば、今の時代の世界の実像がおぼろげに見えてくるかも知れません。

2008年6月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第21回奨学者（五十音順）

池田光弘　IKEDA Mitsuhiro　12・34

大野智史　OHNO Satoshi　13・37

苅谷昌江　KARIYA Masae　14・40

川島沙紀子　KAWASHIMA Sakiko　15・43

清川為都子　KIYOKAWA Itsuko　16・46

H.K　17・49

肥沼義幸　KOINUMA Yoshiyuki　18・52

近藤千草　KONDO Chigusa　19・55

施井泰平　SHII Taihei　20・58

鈴木敦博　SUZUKI Atsuhiro　21・61

鈴木雅明　SUZUKI Masaaki　22・64

髙橋恒道　TAKAHASHI Yoshimichi　23・67

土屋雅敬　TSUCHIYA Masataka　24・70

中井幸子　NAKAI Sachiko　25・73

永原トミヒロ　NAGAHARA Tomihiro　26・76

ヒラタシノ　HIRATA Shino　27・79

福村真美　FUKUMURA Mami　28・82

前田朋子　MAEDA Tomoko　29・85

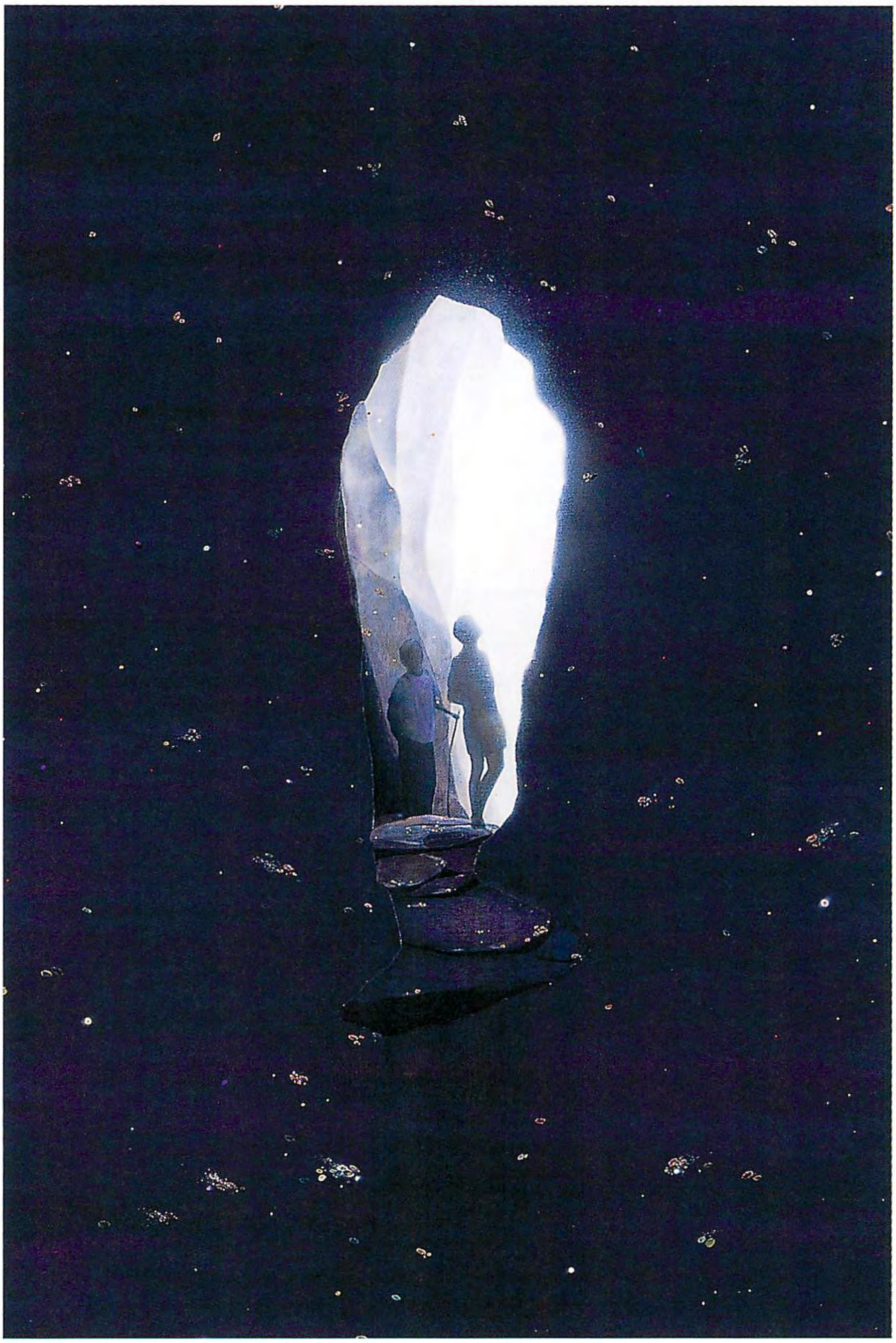
三原奈津子　MIHARA Natsuko　30・88

三森早苗　MIMORI Sanae　31・91

The Scholar Perspective 20

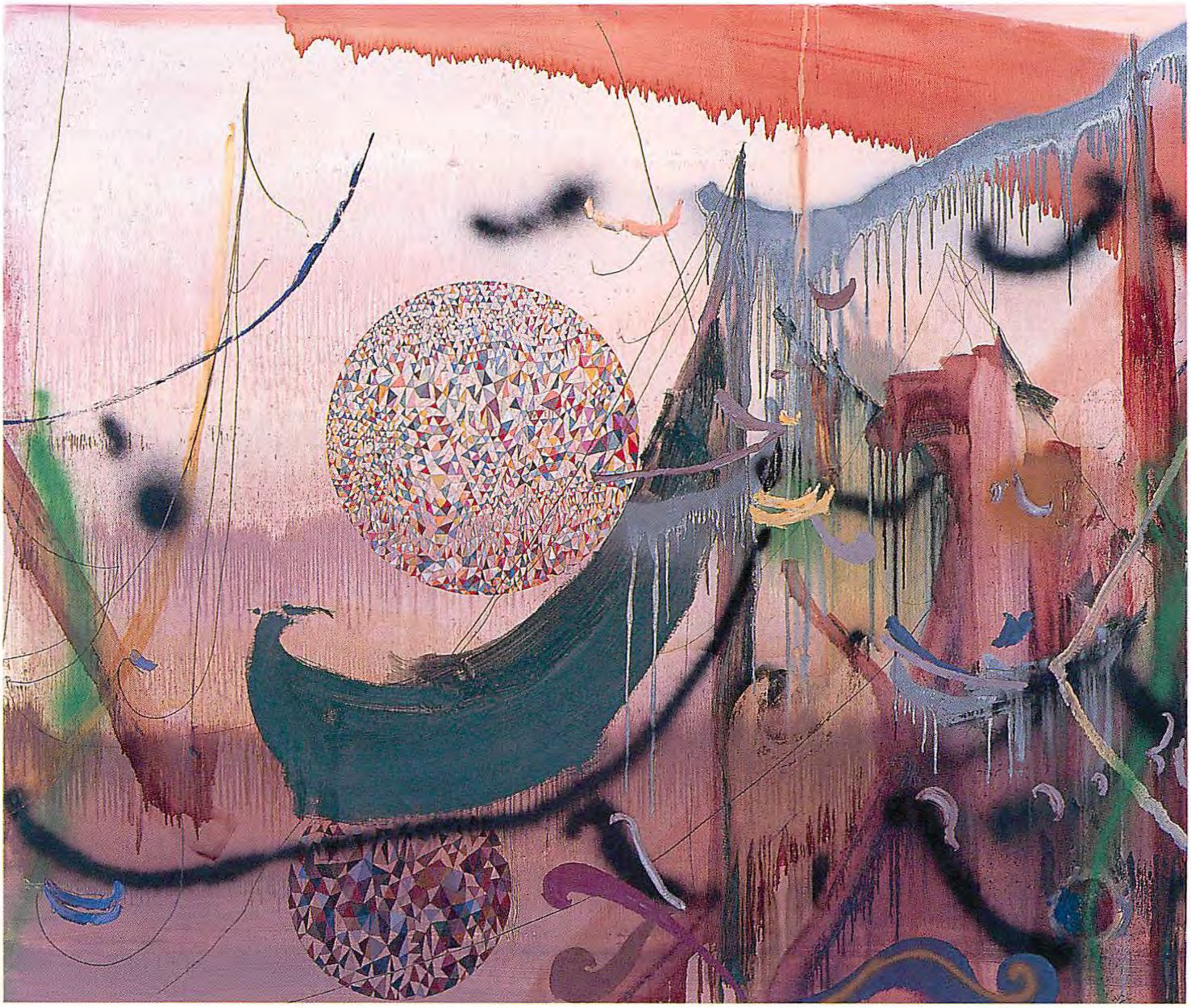
Works

第21回奨学者の作品



池田光弘

untitled
キャンバス、油彩
194.0 × 130.3 ㎝
2007 年
photo by　柳場　大



大野智史

untitled
キャンバス、油彩
162.0 × 193.0 ㎝
2007 年
photo by Ikuhiro Watanabe



苅谷昌江

Hellow Everything

木パネル、油彩

120.0 × 145.5 cm

2008 年



川島沙紀子

湧く丘（展示風景）
木材、発泡スチロール、綿、布、アクリル
270.0 × 400.0 × 500.0 cm
2007 年



清川為都子
garden of spirits - Gate（門）
キャンバス、油彩
117.0 × 117.0 ㎝
2007 年
photo by　末正真礼生



H．K

Untitled-11
キャンバス、アクリル、油彩
130.3 × 130.3 ㎝
2007 年
photo by　上野隆文



肥沼義幸

魔術にかかった女達
キャンバス、油彩
130.0 × 194.0 ㎝
2007 年
photo by　中田寛也



近藤千草
タカハシ　マサヤ
キャンバス、テンペラ
100.0 × 100.0 cm
2007 年
photo by　城戸　保



施井泰平

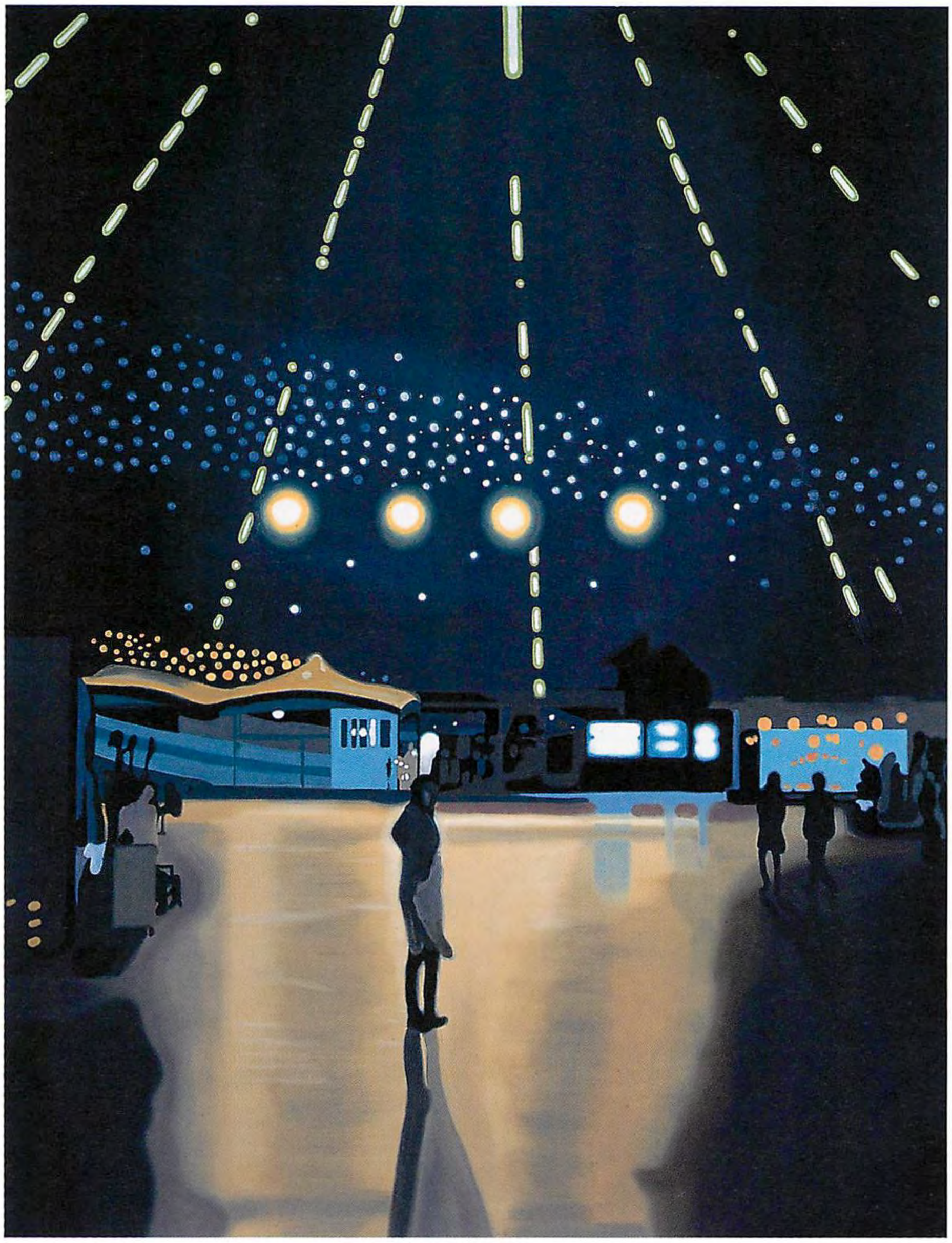
フレッシュインク・リステリン
ボトル、水、インク
サイズは可変
2008 年
photo：Maki Taguchi
Courtesy：Yukari Art Contemporary

【色材成分表示】（水 100ml 当り）
ドローイングインク
TURQUOISE BLUE…0.1ml
YELLOW…0.04ml
LINDEN GREEN…0.02ml
MEXICAN YELLOW…0.02ml



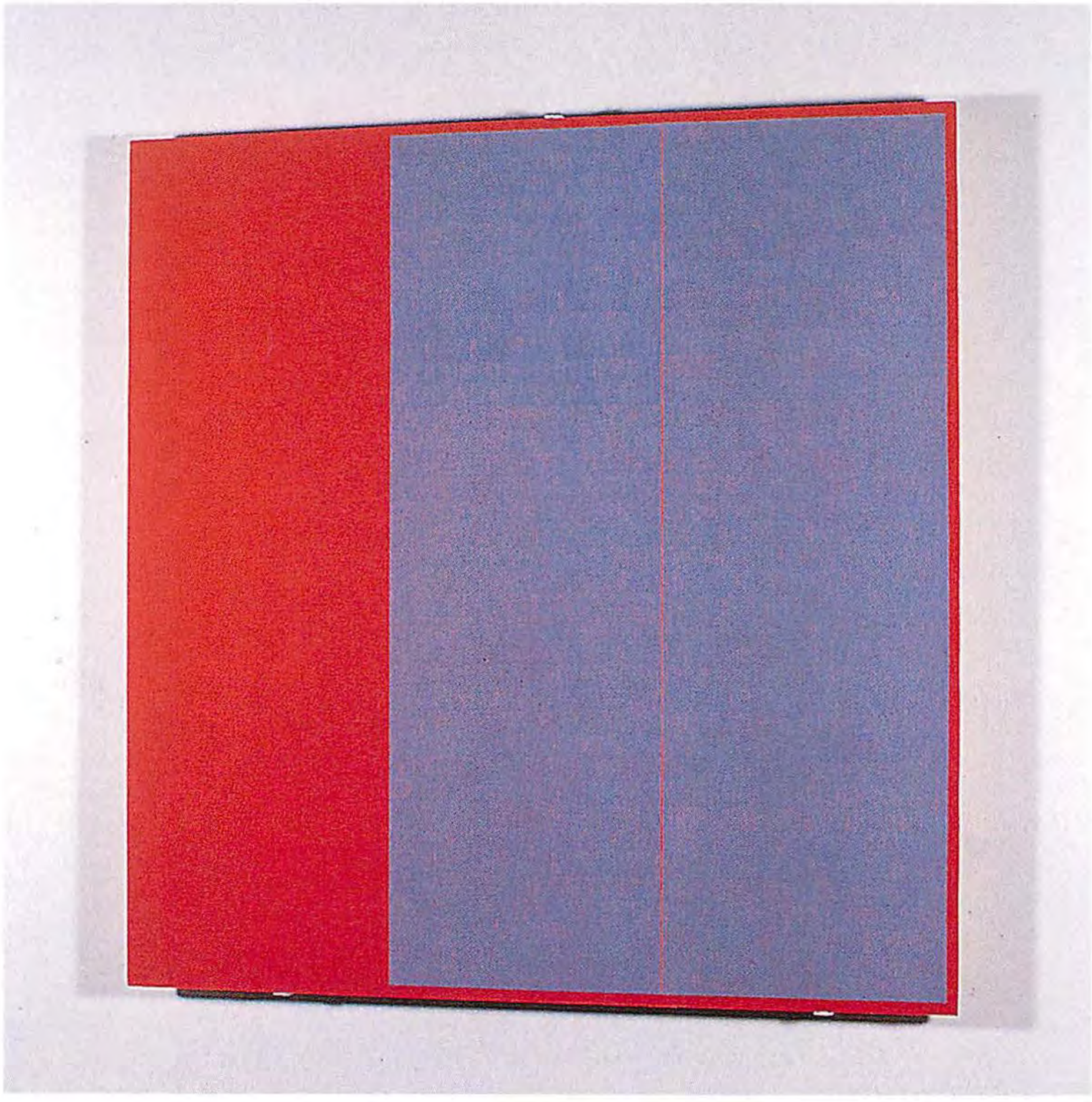
鈴木敦博

DJ psychedelic
キャンバス、油彩
145.5 × 112.0 ㎝
2008 年



鈴木雅明

Untitled
キャンバス、油彩
145.5×112.0㎝
2008年
photo by　城戸　保



髙橋恒道

赤は灰色のために、灰色は赤のために
シナベニヤ、石膏、膠、顔料、テンペラ
45.5 × 45.5 ㎝
2007 年



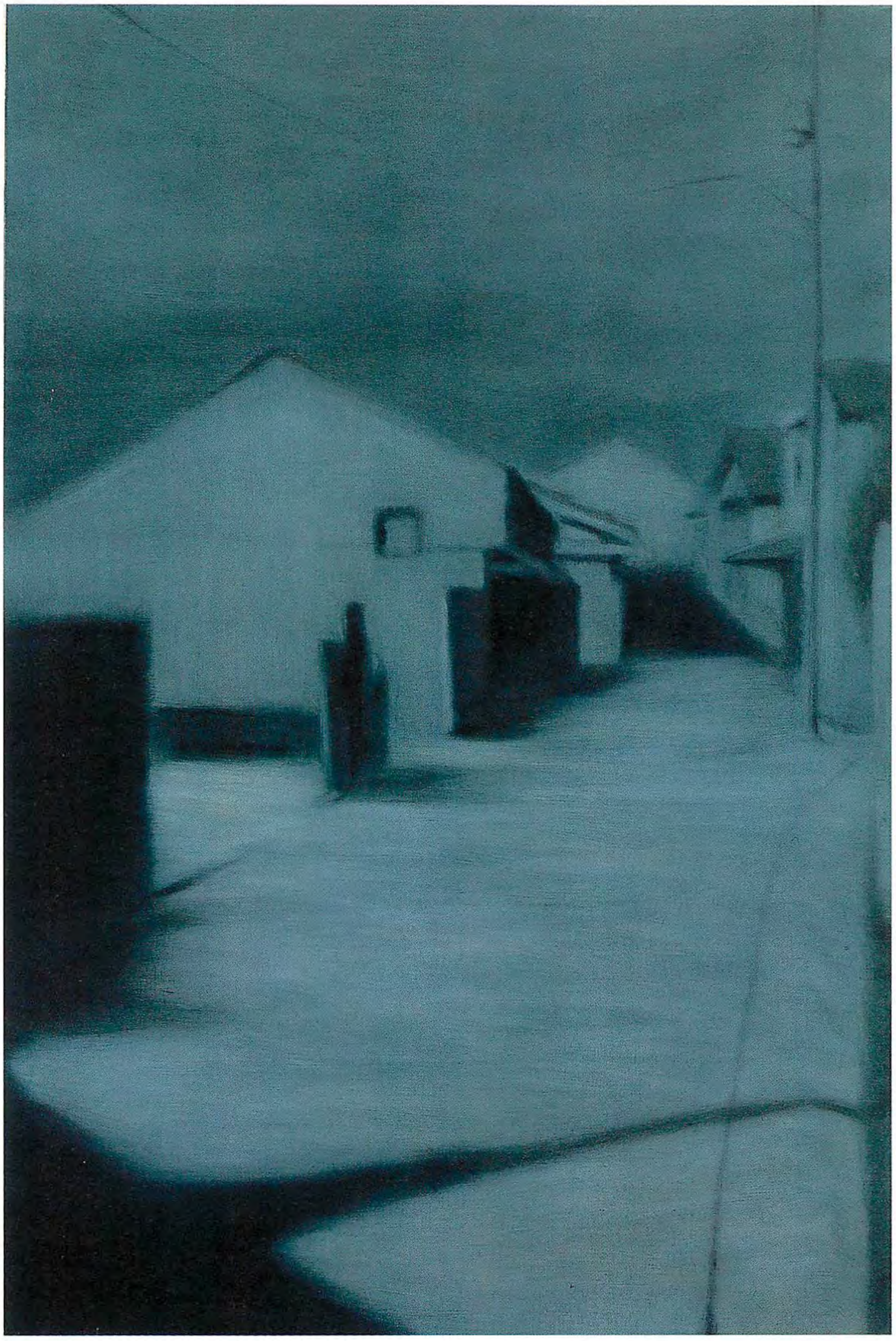
土屋雅敬

あとかた - ふるまい・1
キャンバス、油彩
194.0 × 162.0 ㎝
2008 年
photo by　阿部勇司



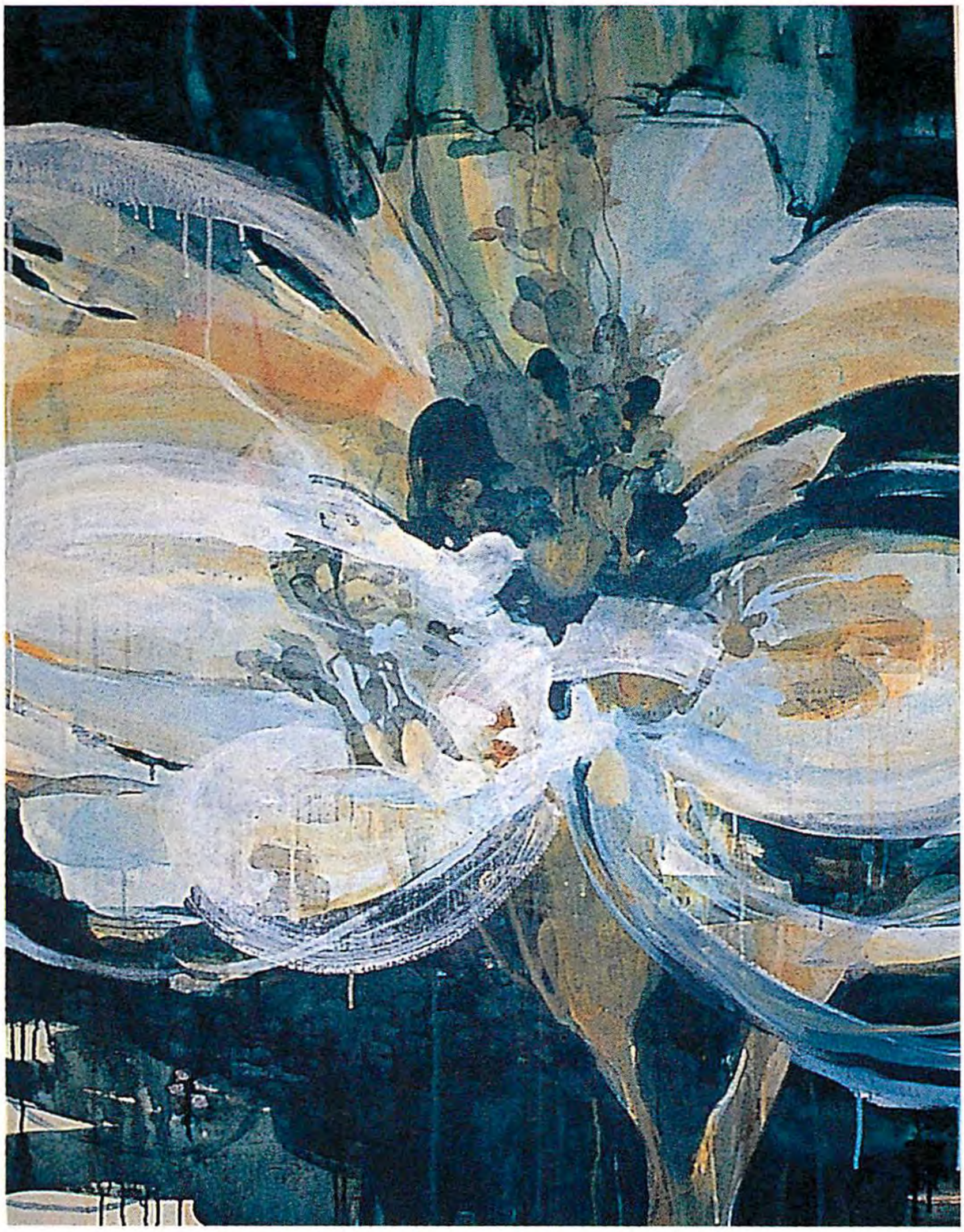
中井幸子

One ～ Where are you?～　No. .69
キャンバス、綿布、油彩
130.3 × 162.0 ㎝
2008 年
photo by　清水啓一



永原トミヒロ

UNTITLED-08
キャンバス、油彩
194.0 × 130.3 ㎝
2008 年
photo by　末正真礼生



ヒラタシノ

エントランス　ブルー
麻布、アクリルガッシュ
116.7 × 91.0 cm
2007 年



福村真美

12 月のプール
キャンバス、アクリル、油彩
80.0 × 100.0cm
2008 年



前田朋子
誘惑する彼女
パネル、油彩
72.7 × 72.7 ㎝
2007 年



三原奈津子

IN MY CLOSET –deep valley–

木、断熱材、寒冷紗、石膏、アクリル

130.0 × 130.0 × 20.0 ㎝

2008 年

photo by　村田　眞



三森早苗

みるものすべて？　あるものすべて？
羊毛、パルプ、色鉛筆、他
180.0 × 225.0 cm
2008 年
photo by　早川宏一

The Scholar Perspective 20

Report

第21回奨学者のレポート

池田光弘

IKEDA Mitsuhiro

イメージが生成する場へ

「イメージ＝イメージすること＝何かと何かが結びつき、元あったものの状態から、その事物、関連性自体が変容すること」

具体的、経験的、つまり個別的事象からイメージが生成する。その同時的な現場を表出すること。

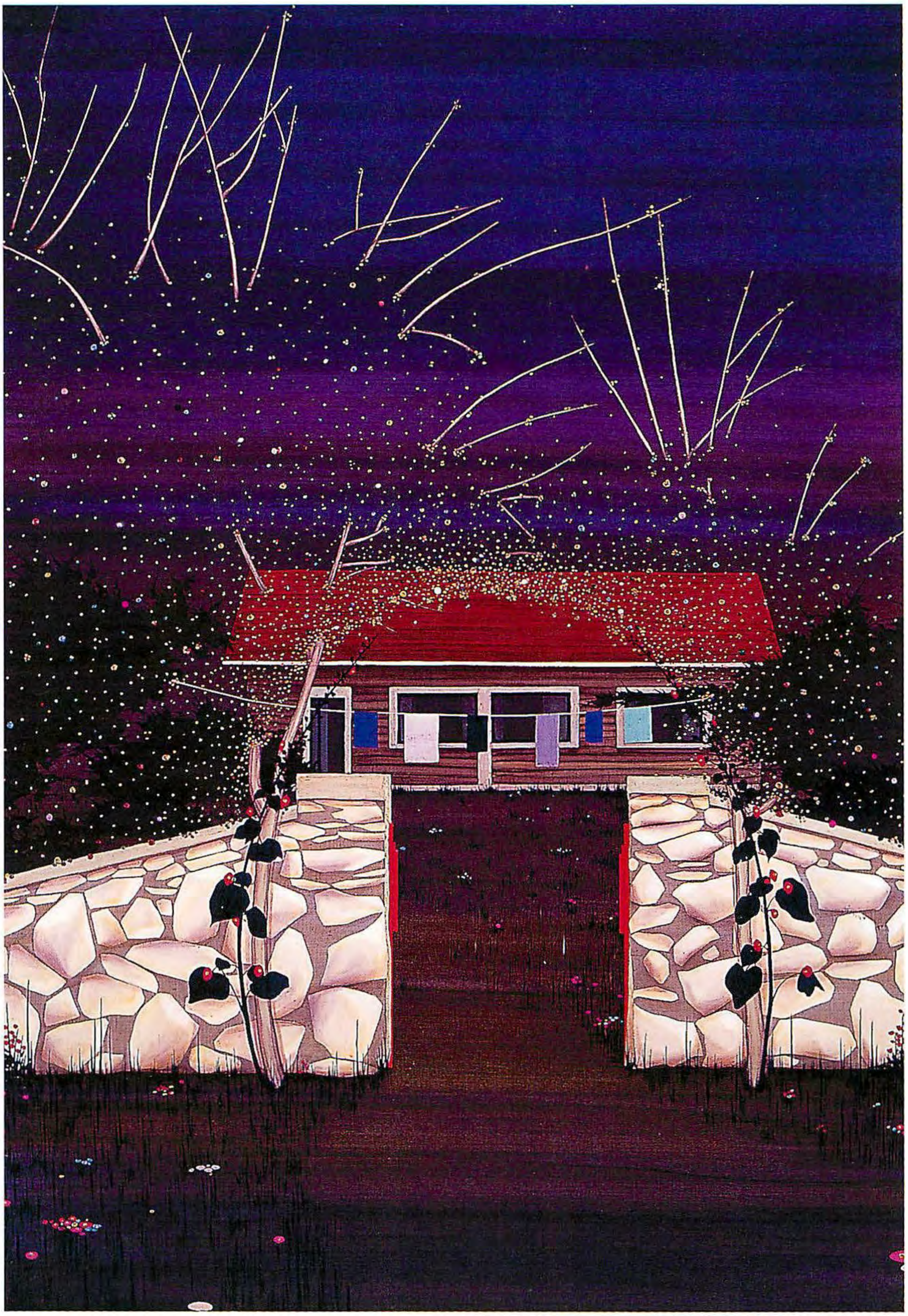
そして、形式的、理性的にメタレベルでイメージすることの構造的なシステムを導き出し、表出すること。

また、作品自体が連続する知覚の運動性、つまりイメージが生成する過程自体であるような双方向性を持ち得た形で表出すること。

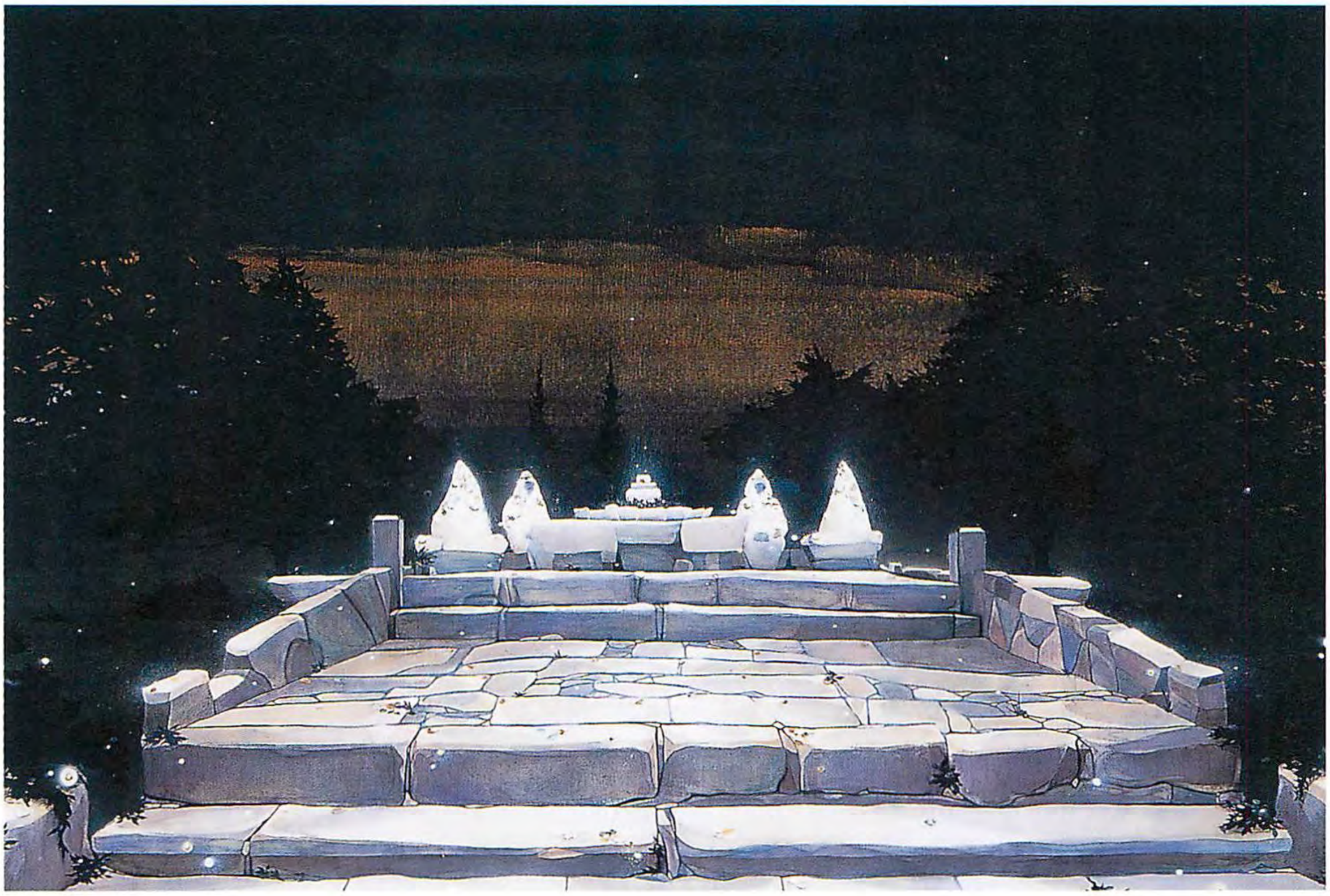
そして、それらに通底するイメージを生起させる、凝縮と拡散の間に起こるエネルギーを繋ぎとめること。

これらのことを全て流動的に循環させること。

そうすることでイメージが生成するその始まりに立つことができるのではないだろうか。



untitled
キャンバス、油彩
162.0 × 112.0 cm
2007 年
photo by　柳場　大



untitled
キャンバス、アクリル、油彩
130.3 × 194.0 cm
2007 年
photo by　柳場　大



池田光弘

1978 年　北海道生まれ
2004 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2006 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科油絵コース修了

個展
2004 年　GALLERY b .TOKYO ／東京
2005 年　GALLERY b .TOKYO ／東京
2007 年　SHUGOARTS ／東京

グループ展他
2005 年　新・公募展　　広島市現代美術館／広島
　　From ／ to #3　　WAKO WORKS OF ART ／東京
2006 年　Four Artists Show　　SHUGOARTS ／東京
　　Art Nova　　Art Basel Miami Beach ／マイアミ〔U.S.A.〕
2007 年　VOCA展2007ー新しい平面の作家たちー　　上野の森美術館／東京

大野智史

OHNO Satoshi

[Prism]

今までの表現方法では、展示空間にドローイングや写真やペインティングやスカルプチャーを、等価に混ぜ合わせてインスタレーションの表現の強度を求めていたが、07年度では、ドローイングで生まれた形態や思考の痕跡をその段階で作品として提出するのではなく、一つの完結した概念を含ませた作品として提出できるように、プランニングを経てペインティングで成立できるように制作を行った。

その一つに「Prism」という作品シリーズがある。この「Prism」の円形ペインティングのアイディアの発端は自身の個人的な生活の場面から生まれたものだった。

それはある夜のこと、台所の窓に一匹のヤモリがくっついていた。少しの間その様子を観察していたら、部屋の明かりに誘われて蛾がヤモリのいる窓に飛んできて、ヤモリがその飛んできた蛾を素早く食べてしまった。この光景を見てハッとしてこの窓で起きている小さな構図に驚かされた。それは、ヤモリは偶然その窓にいたのではなく、飛んでくる蛾を捕らえるために狩りの場所としてそこで獲物を待ち構えていたのである。しかし、ハッとしたのはヤモリにではなく、蛾の方にであった。

自分が蛾になって考えてみると、とても興味深いことが起こっているように思えた。蛾の目線からはヤモリは部屋の明かりに照らされて、くっきりと見えているはずなのに、窓の光に惹かれてそこに死が見えるのに飛んで行ってしまう。蛾にとって死をも上回る窓の光の強さとはどのような存在なのか。習性と言ってしまえばそれまでだが、「光そのものの存在」について考えるきっかけになった。この段階で台所での情景をもとに「光」に関するドローイングをいくつか描いていた。

そして、蛾だけではなく生物全体や人間は「光」とどう関わっているかを考えると、蛾と「光」の関係とどこか似ている構図があるように思えた。それは、はるか昔「光」を宗教の起源として考え、光に絶対的な力を見ていたことや、現代社会においてダイヤモンドが資源的な価値や倫理的な価値観など一切なく、ただ美しく光り輝くという

理由だけで、確固とした価値がついていることなどに見て取れる。破壊の副産物としての核爆発の青白い光もとても美しいのだろう。「光」を善や悪というような見方で捉えることは到底できず、まして、蛾のように人間も習性のように光と関わっていると簡単に言い切れない。しかし、救いや欲望、破滅の場面に度々登場する「光」。

このようにして、様々な理由に関わらずただ美しいと思えてしまう「光」の存在そのものを表現したいと考え、光を屈折させたり分解したり放出する「Prism」という考え方で作品にしようと決めた。作品の具体的な設定は先に述べたような「光」の強さや象徴的な存在から、円形で人間の身長を超える直径3メートルのものとなり、色も一目で把握することのできない色数で、オプティカルな画面となるようにした。

以上のように、自分が実際に見て体験して感じたものをテーマの源泉として、また、作家の内面性に留まることなく、社会の事柄ともリンクさせて作品を構築できたことは07年の成果だと思っています。

「Prism」は自分の表現の中の一部ですが、今後、他のシリーズにも様々な影響がありそうです。



prism
ボードにキャンバス、油彩、水彩、インク
159.0 × 181.0 ㎝
2007 年
photo by Sigeo Mutou



untitled
キャンバス、油彩
直径　59.5 ㎝
2007 年
photo by Ikuhiro Watanabe



大野智史

1980 年　岐阜県生まれ
2005 年　東京造形大学美術学部絵画専攻卒業
2006 年　東京造形大学大学院中退

個展
2006 年　Acid garden　Tomio Koyama Gallery ／東京
2007 年　solo show　Tomio Koyama Gallery art Armory show ／ニューヨーク〔U.S.A.〕
prism Violet　The Contemporary Museum ／ホノルル〔U.S.A.〕
2008 年　magical, ARTROOM ／東京

グループ展他
2004 年　『甑島でつくる。』 甑島アートプロジェクト　上甑島／鹿児島
2006 年　WORM HOLE　magical, ARTROOM ／東京
magical art life　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
au courant　Cayman Island National Gallery ／ケイマンアイランド〔イギリス〕
2007 年　ritual　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京

苅谷昌江

KARIYA Masae

嵐の後の物語

私は、グランドキャニオンが夜になるとエルクが出てくることを知っている。

私は、マルタ島に騎士が今でも住んでいることを知っている。

実際に足を踏み入れなくともいろいろな情報は用意に知ることができる。

制作は、画像（webや広告）のイメージの集積物より選び、断片化し、物語のようなものを描いている。

物語は原因・起源・設定があり、始めと終りで閉じられたもの。

絵画も表面にのみ定着する、閉じられたもの。

私はモチーフの組み合わせで現れてくる物語のようなものを覗くような視線で制作している。

絵画は見ることはできるけれども、入ることはできない世界。

入ってはいけない架空世界だけれど見る（覗く）ことができる世界。

絵画はイメージリュージョン。その世界にイリュージョンの物語を描く。

モチーフになるものは見たことのあるような（メディアを通して、もしくは知覚した）物や風景。

メディアには膨大な情報が流れ、嵐の様に現れては去っていく。

嵐が去り、破壊され尽くした後に残る静けさや瓦礫の山を眺めるようなものが、閉じた世界の嵐の後の私の物語。



Space Oddity
木パネル、油彩
130.0 × 162.0 ㎝
2007 年



Apple tree
木パネル、油彩
90.9 × 116.7 cm
2008 年



苅谷昌江

1980 年　高知県生まれ
2002 年　大阪芸術大学美術学科卒業
2004 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻（修士課程）修了

個展
2004 年　Reversible Complex　gallery SUZUKI ／京都
2008 年　Meeting　Studio J ／大阪

グループ展他
2002 年　Vector 12　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
2003 年　ART CAMP in CASO　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
2004 年　KYO-RYU　Art Project 新天地／沖縄
2005 年　17 才の脳解剖学者が朝起きて鏡を見る　同時代ギャラリー／京都
2007 年　太秦仕事（Open Studio）　ウズイチアトリエ／京都
ANUSE ART JAM 2007 in KYOTO　京都府京都文化博物館／京都

http://yellowvalleys.net/

川島沙紀子

KAWASHIMA Sakiko

作品制作のテーマ

私の制作のテーマは、意識やイメージの曖昧さと多面性です。

例えば性について、自分が男であるのか女であるのか、それは多くの場合、生まれたときに性器の形によって他者に判断され決定されるアイデンティティーです。その後、その判断に基づき社会的に作られた性のイメージに支配されることになります。本人の自我の意識は、それに先行して与えられた性別による社会からの認識、自身での認識の下どれほどに及びうるのでしょうか。自我の曖昧さを知ることが、自我を認識するためのきっかけになるのではないかと考えます。私は両性具有的なシンボルをモチーフにすることで、性の認識、自我の認識の曖昧さを表現しています。

また、現在の消費生活が成り立っているのは、イメージを操作し、季節ごとに流行を変化させていく側があり、消費者はそれに合わせて商品を購入させられているからです。このようなことが成り立つための条件の一つはイメージの曖昧さです。流行のイメージは、上品、下品、かわいい、悪趣味などの不確かな境界線の間を行ったり来たりしています。イメージはそれぞれの時代、社会が作ったもので、資本主義による消費社会に生まれた私達は、日常的に絶えずそのイメージを刷り込まれ続けています。企業によって作られた流行のイメージに翻弄されていると分かっていても、お金を出して商品を買うことは快楽なのです。

このような状況を象徴するものとして私が利用するモチーフが女性の睫毛です。女性達は、現代の美人の第一条件とされた大きい目を作るため、睫毛を日々肥大化させています。私はこの睫毛に性のイメージを重ねてみています。性は生命と結びつけれ ば極めて神聖なものとして扱われます。その一方で売買の対象となり卑猥なものとして扱われるのです。目の輝き、と言ったときの清らかなイメージと、肥大化された睫毛のセックスシンボル的イメージという二面性のイメージと重なります。しかし、その二面性ですら曖昧な境界線で人々の中に認識されています。

私は多面的で複雑なイメージを持つ色として、ピンク色を多く用いています。ピンク色の持つ純粋なイメージといえる幸福感

に加え、「女の子＝ピンク色」という日本社会が女性に求めるある種のジェンダー的役割、日本においての性風俗のイメージカラーであることなど、記憶や経験を伴う知的な部分から生じるピンクへの違和感などによって、ピンク色のイメージは複雑になっています。また、私は今街に溢れるピンク色に、純粋な幸福感とも、社会が与えた女性的な色のイメージとも違う、歴史や記憶を伴う現実とは切り離された、それ故に現代的ともいえるイメージを感じています。現代社会に生じた闇を見えないようにする、享楽的な色、それは得体の知れない不安感や苦しみからの自己防衛のための享楽です。

さまざまなものに対するイメージは、その人が生きてきた社会や時代、個人的経験や性別、流行などさまざまな要素によって無意識的に作られていくものです。そのイメージに微妙なずれを与えたイメージを作ることで、観た人が感覚的に違和感を感じ、自分が持っているイメージの曖昧さを意識してもらいたいと考えています。



雫
発泡スチロール、アクリル、造花、ウィッグ
70.0 × 40.0 × 40.0cm
2007 年

湧く谷
布、ビーズ、綿、アクリル
23.0 × 16.0 ㎝
2007 年





川島沙紀子

1978 年　岐阜県生まれ
2003 年　名古屋芸術大学美術学部絵画科洋画コース卒業
2005 年　多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了

個展
2004 年　春のオク・ソコ　　ガーディアン・ガーデン／東京
2005 年　sleeping with spring　　The Artist Network ／ニューヨーク〔U.S.A.〕
2006 年　蜜室　　Pepper's Loft Gallery ／東京
　　蜜林　　新宿眼科画廊／東京
2007 年　湧く丘　　新宿眼科画廊／東京

グループ展他
2000 年　第 5 回昭和シェル石油現代美術賞展　　目黒区美術館区民ギャラリー／東京
2001 年　グラフィックアート「ひとつぼ展」　　ガーディアン・ガーデン／東京（'03）
　　essence　　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター／愛知
　　雨の日が楽しくなる「ハッピーアンブレラ 200」　　ガーディアン・ガーデン／東京
2002 年　200 人のクリエーターによるオリジナル和凧展「TAKO KITE」　　ガーディアン・ガーデン／東京
2003 年　地●点　　ギャラリー山口／東京
　　230 人のクリエーターによる MINI MINI MOTOR SHOW　　ガーディアン・ガーデン／東京
　　ARTISTS BY ARTIST　　森アーツセンター内 53 階ギャラリー 1 ／東京
2004 年　PET OBJECT 展　　GALLERY eSIESTA ／東京
　　大人揚棄　　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター／愛知、CAP HOUSE ／兵庫、PRAHA PROJECT ／北海道
　　pollen　　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター／愛知
2005 年　270 人のクリエーターによるオリジナルジーンズ展　JEANS SHOP GINZA　　ガーディアン・ガーデン／東京
　　6 days 6 words　　府中市市民ギャラリー／東京
　　280 人のクリエーターによるオリジナルエコバッグ展　ECO BAGS SAVE THE EARTH　　ガーディアン・ガーデン／東京
2006 年　ドローイングショー「形式と拓」展　　中央美術学院内ホール／北京〔中国〕
　　280 人のクリエーターによるオリジナル扇子展　GOOD DESIGN GOOD SENSU　　ガーディアン・ガーデン／東京
2007 年　「ひとつぼ展」スカラシップ奨学生展　　ガーディアン・ガーデン／東京
　　ECO × DESIGN　日本のクリエーター 300 人によるエコグッズデザイン展　　上海当代芸術館／上海〔中国〕
　　290 人のクリエーターによるオリジナルカップ＆ソーサー展　お茶にしませんか？　　ガーディアン・ガーデン／東京

清川為都子

KIYOKAWA Itsuko

作品について

幼い頃から取り立てて自然に恵まれた土地で生活したことはないのに、いつしか自然をモチーフとした作品を作るようになった。覚えているのは、道路脇の木の葉が擦れるザワザワという音や緑の匂い、体にあたるひんやりした風の心地よさ、大雨の前の空の色、近くの川の水面の光、コンクリートに映る夏草の影の濃さなどで、どれもごく日常的な自然との接触に過ぎない。絵葉書にでてくるような風景とはほぼ無縁の生活であったが、こうした些細な感動は体に染みついていて、それが作品の根となった。

たまに身近にある草むらなどをぼんやり眺めていると、そこに何かが潜んでいるような気がしてならない。日本人的な自然信仰が私の中にも根付いているのかもしれないが、目に見えない力のようなものが、地面や風や水の中でじっと息づいているように感じる。生まれて、成長して、死んで、また生まれ変わって…と絶え間なくその形を変えながら存在している何かのいる場所を「garden of spirits（精霊の庭）」と名前を付けて、作品のコンセプトにした。輪廻転生を信じるわけではないが、もし人間やその他の生物に魂というものがあれば、こんな自然の中で姿を変えながら生きているのかもしれないと思う。

私が惹かれているのは、自然の中で直感するや、特定ではない動的な存在感で、それが何なのかを知るための解が制作することであるように思う。目に映っている木や花そのものの風景が、その求める存在の本質と知りつつ、かといって、どうやって見つけるかその手立てもわからないので、思いつくままというか、ほとんどやみくもに筆を走らせている。そのせいか、初めのイメージとはかけ離れた作品になってしまうこともたびたびである。

幾度となく方向性が変わりながら、いつも自然のモチーフに落ち着くのは、自分にとってそれが一番リアリティのある存在であるからだろう。現代人である私が自然に溶け込んで暮らしているとは言い難いが、それでも身近な人の死に接するとき、人間

も植物や動物と同じ運命にあるとはっきり実感することがある。毎日繰り返される生の営みが、他の自然の創造物のそれと等しいことが、素朴に信じられるようになった。その生死の変化の過程に自分との接点を感じるとき、私の興味は尽きない。



garden of spirits-acid rain（酸性雨）
キャンバス、油彩
117.0×117.0㎝
2007年
photo by　末正真礼生

vallery of winds Ⅳ（風の谷）
キャンバス、油彩
91.0×91.0㎝
2007年
photo by　末正真礼生





清川為都子

1964年　大阪府生まれ
1987年　大阪教育大学教育学部美術科卒業
1993年　ロングアイランド大学芸術学部芸術科大学院修了（ニューヨーク州 - U.S.A.）

個展
1995年　ウエストハーバーギャラリー／ニューヨーク〔U.S.A.〕
1997年　ギャラリーDEN／大阪
　　ギャラリー白川／京都
1999年　ギャラリー白川／京都

グループ展他
1993年　第38回ロングアイランドの作家展　ヘクスチャー美術館／ニューヨーク〔U.S.A.〕('94)
1994年　第6回グラフィノーバ国際版画・ドローイング展　オストラボスニアン美術館／フィンランド
1996年　PRINTS 8　シティギャラリーI・M／大阪
　　京展　京都市美術館／京都
1998年　第4回札幌国際現代版画ビエンナーレ　北海道立近代美術館／北海道
　　"Women's Work" 女性作家展　UHLギャラリー／コロラド〔U.S.A.〕
2000年　グループ展　ギャラリーJUNO／ニューヨーク〔U.S.A.〕('00)
2004年　ASKA展　四日市市民文化会館／三重（'05、'06、'07）
2006年　第58回県展　三重県総合文化センター／三重
2007年　アートフォーラム三重展　三重県総合文化センター／三重（'05）

http://www.garden-of-spirits.com

H.K

制作にあたって

釣りを始めてまもなく、友人にある釣りの映像を見せてもらった。プロの釣り師が解説をしながら釣りをしているものだった。気象条件、時間、場所、魚の状態、技術など、もの凄い蘊蓄を語りながら釣りをしていた。

だが、その釣り師は魚が釣れる寸前にこうつぶやいた。

「魚を感じます……」

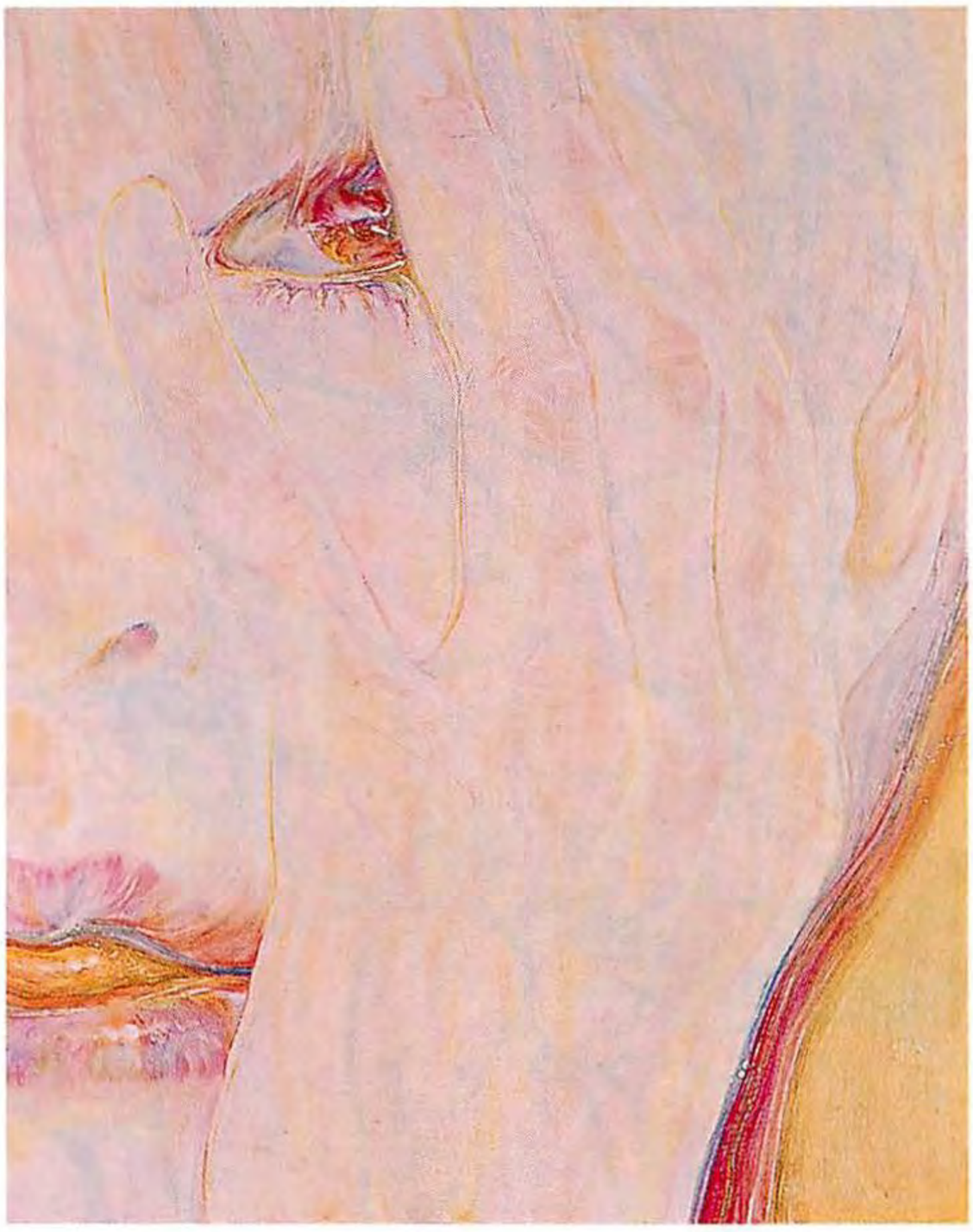
色々なことを思い考えます。余計なことは無駄だと思われることまで考えます。考えることは作品を作る上での、骨組みの様な役割だと思います。表には出ないですが作品と自分を支えてくれます。ビジュアルとして絵が良くなるか悪くなるか、最後は勘が頼りだと思っています。

釣りではこの勘がほとんど外れます。作品ではそうならないようにしたいものです。



Untitled-17
キャンバス、アクリル、油彩
97.0 × 162.1 ㎝
2007 年
photo by　上野隆文





右：Untitled-15
左：Untitled-16
キャンバス、アクリル、油彩
各90.9×72.7㎝（2枚1組）
2007年
photo by　上野隆文



H．K

1968年　埼玉県生まれ
1992年　武蔵野美術大学卒業

個展
2005年　フタバ画廊／東京
2006年　ギャラリイK／東京
2007年　ギャラリイK／東京
2008年　ギャラリイK／東京（銀座）にて9月8日～13日迄開催予定

肥沼義幸

KOINUMA Yoshiyuki

生を謳歌するエネルギー

自分の身近に起きたこと、社会の出来事に題材を取り作品を作っています。ある新聞記事を読んだ瞬間に頭の中にその事件のイメージが湧いてくるのです。油彩やドローイングでそのイメージを留める。加害者のみのイメージだけに限らず、被害者だったりもします。

僕が言いたいこと。

どんなに主題や画風が暗くても、その根底にある「生」を描くこと。

なんども描き直していると、ふと作品が魔術にかかったように出来上がり、僕自身にも作品を見てくれている人にも驚きが伝わったら・・・

そんな瞬間はあると思う。



仮面親の肖像
キャンバス、油彩
65.0 × 50.0 cm
2007 年
photo by　中田寛也



5つの業と1つの災い（展示風景）
木炭紙、木炭、パステル
各100.0×65.0㎝
2008年
photo by　中田寛也



肥沼義幸

1982年　埼玉県生まれ
2005年　武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業

個展
2006年　小野画廊・京橋／東京
　　Gallery Unseal／東京
2007年　ART TRACE Gallery／東京
2008年　Gallery 58／東京

グループ展他
2004年　Cinre First Exhibition　　ギャラリー・ルデコ／東京

http://www.geocities.jp/koinumayoshiyuki/

近藤千草

KONDO Chigusa

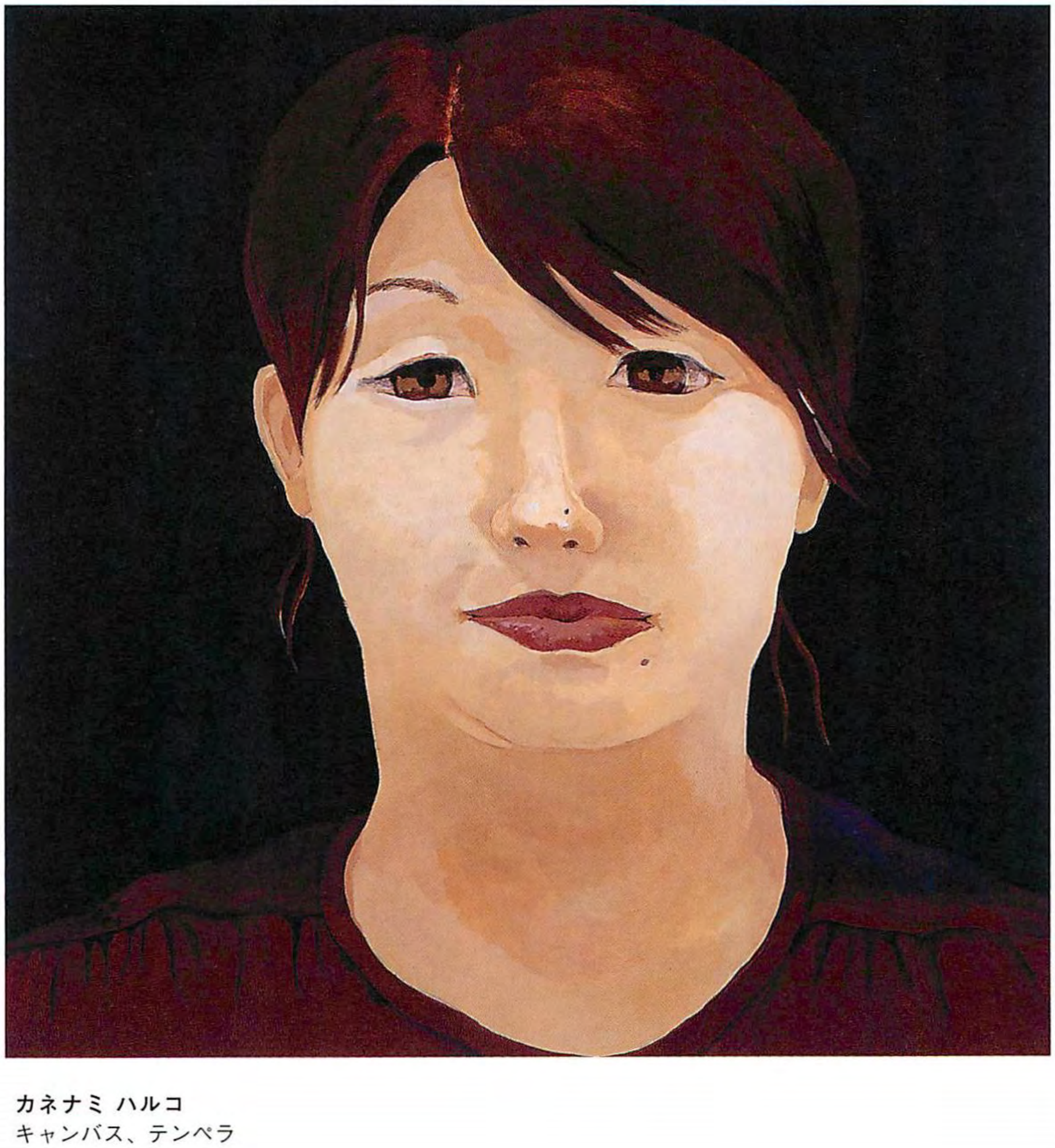
制作について

私は現在、実在するモデルのスケッチをし、それをもとにしてキャンバスにテンペラで描くという方法で制作をしています。タイトルはモデル本人の名前をカタカナで表記しています。

私は人の顔に強い興味があるわけではなく、人の顔を絵に描くということに興味があるのかもしれないと思っています。

日本美術の中で、「影」と呼ばれる死者を理想化して描いた人物画があることを知りました。

実在のモデルを描きながら、「絵の中で生き続ける人」が描けたら、と思っています。



カネナミ ハルコ
キャンバス、テンペラ
100.0 × 100.0 ㎝
2008 年
photo by 城戸　保



スギウラ サトシ
キャンバス、テンペラ
91.0×91.0㎝
2007年
photo by 城戸　保



近藤千草

1978年　愛知県生まれ
2003年　愛知県立芸術大学美術学部油画専攻卒業
2005年　愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了

個展
2004年　名古屋市民ギャラリー矢田／愛知

グループ展他
2003年　A・fam展　　GALLERY KUBOTA／東京
　　美系優秀　　文化フォーラム春日井／愛知
2004年　不足は創造力　　平林薫アートスタジオ／静岡
2005年　絵の回路　　ギャラリーG／愛知（'06、'07、'08）

施井泰平

SHII Taihei

母と大戸屋に行く際に気をつけなければならない事

ちょっと前、母と大戸屋に行った。行く途中、いろんなことを考えた。なんで津田沼にあるお店ってチェーン展開している店ばかりなんだろう。ここには個性的な店もなければ、温かみのある店もほとんどないじゃない。このままではこの街から個性的な文化なんて生まれないのではないか。ではどんな街になって欲しいのか。ヨーロッパにあるような職人工房がひしめいているような街も良いが、やっぱり日本の中では昔ながらの個人商店がにぎわっている商店街が理想だ、なんて思っているうちに目的地の大戸屋に到着したので入店した。母はいつも「チキン母さん煮定食」を頼むってメニューを見てすぐに、注文を決めたという素振りを見せたので、焦った。なんで焦ったかというと、僕は大戸屋に来る時は決めているのだけど、今回「チキン母さん煮定食」を頼めば、店員に「こいつ、母さんと一緒に大戸屋に来て、母さん煮定食頼んでるよ」と思われてしまうと深読みし、選択肢からはずしてしまった為に、何を注文すれば良いかわからなくなってしまったからである。結局、さんざん迷ったあげく「地鶏の親子丼」を注文したオレ。しかし、食べ終わった後に、親子丼の親子性に気づき、恥ずかしくなった。数あるメニューの中から、なんでわざわざ紛らわしいコンセプトのものを選んでしまったのだろう。帰り道はその事について考えた。脚本家の松尾スズキによく似た友人がいる。その友人とファミレスに行くと、周りから松尾スズキの話が聞こえて来ることがよくある。ファミレスの客は、友人の顔を見て無意識のうちに松尾スズキモードになってしまい、つい松尾スズキの話をしてしまうのだろう。このように、何かを認識した瞬間、もしくは認識したかすら気づかないうちに脳みそが反応してしまうことは誰にでもある。隣人の言った言葉と同じ言葉を発してしまうなんてのは勿論、過去に見聞きしたことのあるものに影響されてしまうのなんかも、同じ松尾スズキ現象かもしれない。そう考えると脳みそはすごい。自分の行動すべてが、松尾スズキ現象によって操作されている気にすらなる。考えてみれば、教育なんて松尾スズキ現象の中長期的展望バージョンじゃないか。物事の本質がどう

だとか以前に、すべての事象に対して脳みそが自動的に反応するよう仕込まれているんだ。でも、だとしたら僕らは何のために生まれ、生きているのだろう。行動が自動的に行われているなんて、カッケの検査で反応する足のようではないか。そんな、足のような人生なんてマッピラだ。と思うけど、その反応すらカッケの検査で反応する足のようだ。というその反応すらカッケの検査で反応する足のようだ。キリがない。と、思ったところで小便がしたくなり、コンビニに入った。小便がしたくなるのは生理現象だから松尾スズキ現象とは違うと自分に言い聞かせながら、チャックを下ろし、続きを考える。松尾スズキ現象に気づいた時は、それに対してどう反応するかが個性の見せ所だ。例えば、気づいていながらも逆の行動をしたなら、その姿は滝を登る鯉のように美しいのではないか。でも滝を登る鯉という発想自体、松尾スズキ現象の賜物だから、普通に登るだけではカッケ検査の足だ。それは嫌だ。と思いながら、小さな滝のように流れる小便を、なんとも不思議な様子で登る鯉の姿を思い浮かべた。



午後のアクリル
ペットボトル、水、アクリル、筆
サイズは可変
2008 年
photo by Maki Taguchi

【色材成分表示】（水 100ml 当り）
アクリラ
YELLOW OCHRE…0.18ml
RAW SIENNA…0.08ml
BURNT SIENNA…0.08ml
TITANIUM WHITE…0.08ml
CADMIUM RED PURPLE…0.07ml
CERULEAN BLUE…0.04ml
PEACOCK BLUE…0.02ml
CADMIUM RED LIGHT…0.02ml
CADMIUM GREEN DEEP…0.02ml

ブルドック・ウスターミックス
ボトル、水、アクリル、インク、顔料
サイズは可変
2008 年
photo by Maki Taguchi

【色材成分表示】（水 100ml 当り）
アクリラガッシュ
LIGHT RED BRIGHT･･･0.6ml
SEPIA･･･0.2ml
BURNT UMBER･･･0.14ml
LAMP BLACK･･･0.14ml
JET BLACK･･･0.06ml
ドローイングインク
MEXICAN YELLOW･･･0.4ml
BLAK･･･0.34ml
VERMILLION･･･0.2ml
YELLOW･･･0.1ml
顔料
YELLOW OCHRE･･･少々
BURNT SIENNA･･･少々





施井泰平

1977 年　東京都生まれ
2001 年　多摩美術大学美術学部絵画科油絵専攻卒業

個展
2001 年　さかさまのレスポンス　pepper's loft gallery ／東京
2002 年　72 枚の絵画によるインスタレーション　大阪帝国ホテル／大阪
2005 年　天下泰平プロジェクト展　pepper's loft gallery ／東京
2008 年　〈タイトル未定〉　Yukari Art Contemporary ／東京（目黒区）にて 8 月 23 日～ 9 月 20 日迄開催予定

グループ展他
1999 年　ンミニュニ展　ギャラリー・ルデコ／東京
　　ホリホック展　多摩美術大学／東京
2000 年　スクエア展　東急スクエア／東京
2002 年　「peer review」　ギャラリー・ルデコ／東京
2003 年　0 号展　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
　　「」　MAISON MARTIN MARGIELA ／東京
　　ARTISTS BY ARTISTS　森美術館／東京
2004 年　peer review　パラサイト／東京
2005 年　新公募展　広島市現代美術館／広島
2006 年　「SCOUTED!施井泰平×いしかわかずはる×淀川テクニック」produced by yukari-art　ギャラリーエス／東京
　　飯田竜太・内沼晋太郎・施井泰平展「森」　Kukui Cafe ／東京（'06、'08）
2007 年　アート@アグネス 2007（yukari-art）　アグネスホテルアンドアパートメンツ東京／東京
　　「十人十色　by YUKARI ART CONTEMPORARIES」　ギャラリーエス／東京

http://www.taihei.org/

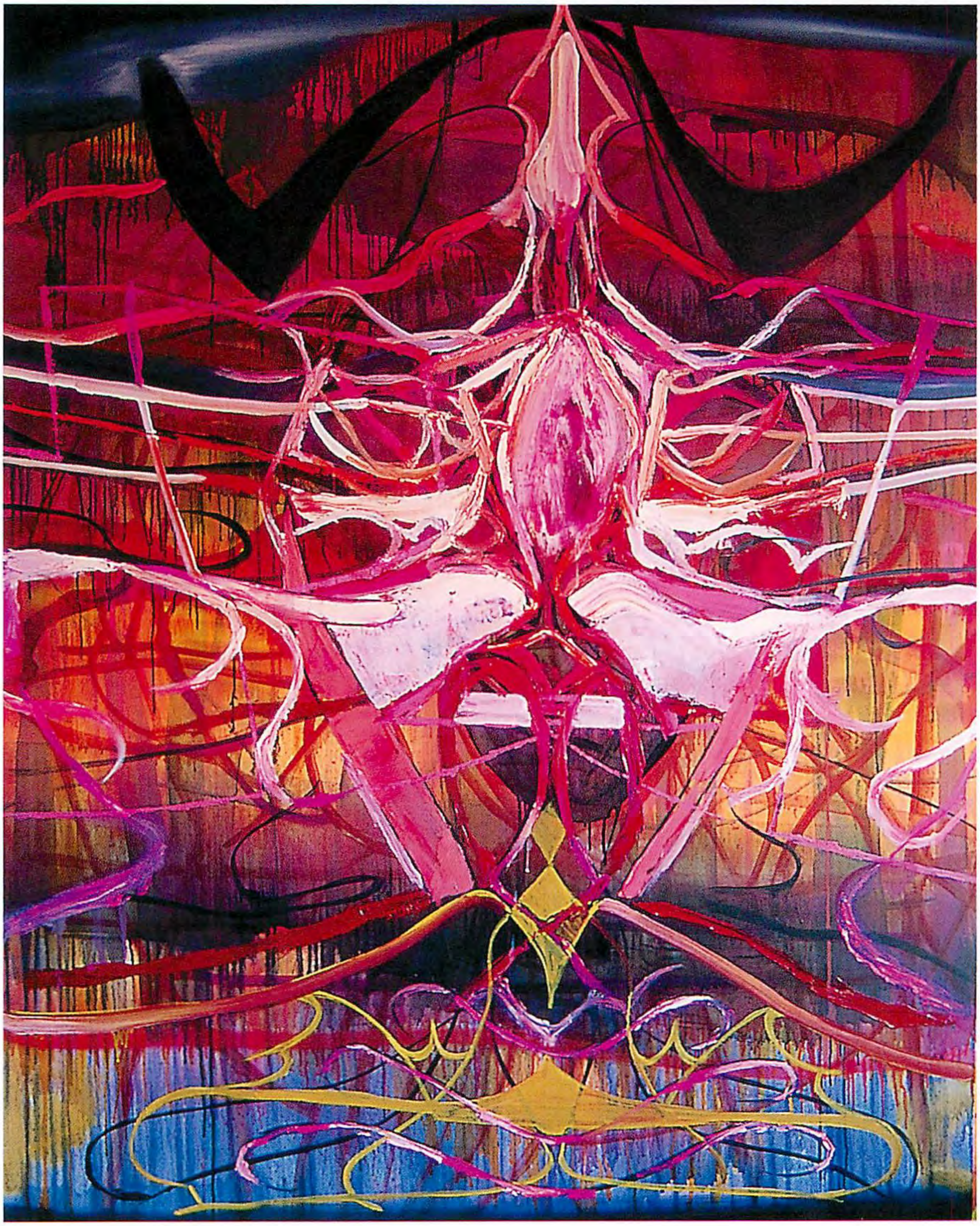
鈴木敦博

SUZUKI Atsuhiro

絵画の絵画性

実際に絵を見ているときや、描いているときではなく、その絵を描いている場所・空間・時間を、身体・頭に連関させて記憶させている。その絵を制作しているときに事件が現場で生まれる。絵画の場合、二次元空間からの抑圧から私たちが生活する三次元空間まで、主張を押し込めるのではなく、浸出させることもできる。絵画というもの自体が出っ張ったものであり、物体であるという認識である。絵画という二次元の虚構性を利用して表現していくのではなく絵画を描くということを追及していく。それは、絵の具の層や触感、そこに残される痕跡によって成立していく。そして絵画は生活空間としての三次元を超越できる。

乾いた大地や湿っている田園を走って行く時の疾走間、混沌とした中に生まれる調和、諧調の気持ちよさ。灼熱の太陽がもっている力。速度がもたらす時間の変容。都市がもっている雑音。高い山にある精神性。地球は暗く、美しい。世界の中心ではないところで、自分が感じているものを絵画で描くことで、痕跡として残していきたい。



cathedral
キャンバス、油彩
162.0 ㎝×130.3 ㎝
2008 年



The highest mountain
キャンバス、油彩
60.6 ㎝×72.7 ㎝
2008 年



鈴木敦博

1980 年　愛知県生まれ
2006 年　東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業

グループ展他
2004 年　BMSS　YEBISU ART LABO Gallery ／名古屋
『甑島でつくる。』 甑島アートプロジェクト　上甑島／鹿児島
2005 年　Sunday Paintings　東京造形大学 CSF ／東京
シェル美術賞展 2005　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
Zero Hour　東京造形大学大学院ギャラリー／東京
2006 年　名古屋市美術館特別展「名古屋」の美術 - これまでとこれから -　名古屋市美術館／愛知
2007 年　第 5 回夢広場はるひ絵画ビエンナーレ　はるひ美術館／愛知

鈴木雅明

SUZUKI Masaaki

制作について

最近制作をしているとふと思い出すことがある。

僕は子供の頃漫画が好きで当時の流行の漫画に影響されながら、らくがき帳に鉛筆という至ってシンプルな方法で毎日漫画を描いていた。普通なら鉛筆をペンに持ち替えたりしてより本格的に描いていくようになるのだろうが、僕の場合はらくがき帳に鉛筆というスタイルのまま高校生の頃までのめり込むようにそれを続けていた。大抵2～3時間で集中力が途切れてしまうので、描き始めて集中力が途切れたらやめるということをほぼ毎日、実に10年近くも続けていたことになる。

そして鉛筆を筆に持ち替えて今も絵を描いているが、当時と今とでは〝描く〟ことに対しての違いが生じてきている。

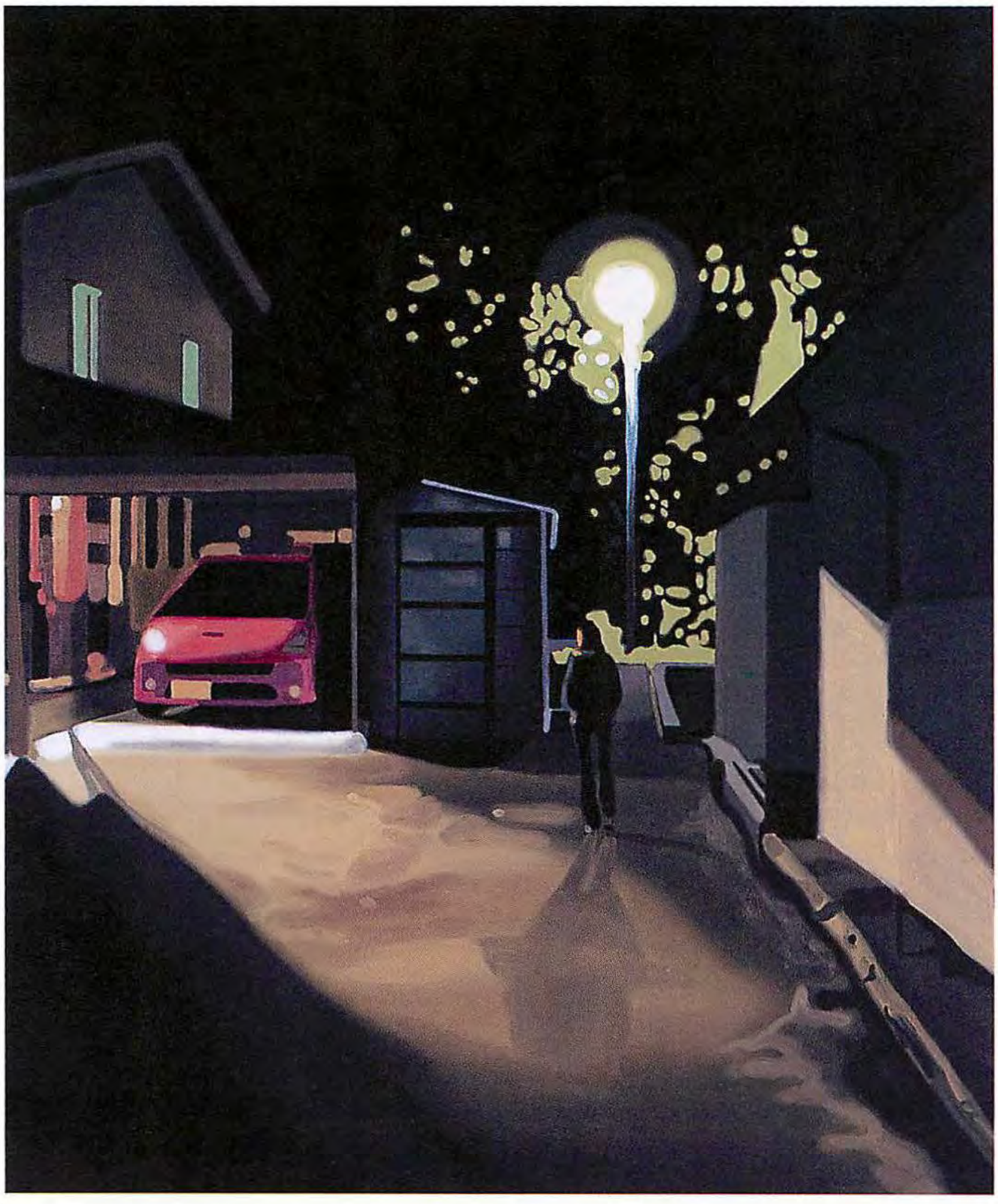
一つはある程度の完成度を求めてしまうということ、そして予定調和をなかなか打破できないということがある。絵を描いていく過程、特に描き始めの段階で既に完成しているのではと思うことがある。しかし今までの自分の制作、作品と照らし合わせて、やはりここまで描かなければいけないと絵自体の完成の予兆に気づきながらも素通りしてしまう。

また、写真をもとにしているということも予定調和の一因になっている気がしている。イメージを組み立てる上で、写真は便利な反面、その一つの画像に引っ張られ過ぎてしまうという危険も孕んでいるからだ。

今はこれらの問題をどう乗り越えるか試行錯誤している。まだ形になってはいないが、この試みを始めてからは〝描く〟ことを以前よりもずっと意識している気がする。描かれているイメージが重要なのではなく、描くこと自体へのアプローチの方が重要なのではないかと思うようになってきた。僕は以前から夜景を描いているが、夜景自体に意味を込めているわけではなく、モチーフは描くことと見せることとの媒介のような存在でしかないと考えている。僕の作品を見た人から寂しさや懐かしさを感じると言った感想をもらうことがあるが、それはあくまでも副産物的なものであって本質ではないと思う。

漫画を描いていた頃は余計なことに縛られ

ず、ひたすら〝描く〟ということに熱中していた。それを展示するわけでも売るわけでもなく、〝描きたいから描く〟を実行していたのだ。何をどうやって描くかは自由であり、描く気がなくなったらやめる。当時の方法を今の自分がそのまま実践するのは難しいだろう。しかし〝描く〟ことにこだわって制作を進めていくことは、これからの自分にとって重要なことだと思っている。



Untitled
キャンバス、油彩
72.7×60.6㎝
2008年
photo by 城戸　保

Untitled
キャンバス、油彩
72.7 × 60.6 ㎝
2008 年
photo by　城戸　保





鈴木雅明

1981 年　愛知県生まれ
2004 年　名古屋造形芸術大学洋画コース卒業
2008 年　愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了

個展
2006 年　ギャラリーセラー／愛知
　　はるひ美術館／愛知
2007 年　Bunkamura Gallery ／東京

グループ展他
2004 年　シェル美術賞展 2004　　代官山ヒルサイドフォーラム／東京（'05）
2005 年　第 4 回夢広場はるひ絵画ビエンナーレ　　はるひ美術館／愛知
2006 年　名古屋市美術館特別展「名古屋」の美術 - これまでとこれから -　　名古屋市美術館／愛知
2007 年　第 26 回損保ジャパン美術財団選抜奨励展　　損保ジャパン東郷青児美術館／東京

髙橋恒道

TAKAHASHI Yoshimichi

自作について

絵画形式と絵画空間を創るための方法、作品の独自性について。現在の作品形式は匿名性の強いものであります。独自性と匿名性とは相容れない矛盾することであると思われますが、規則を設けた行為の連続や限定した色、形態。絞られた要素や作業により創られた空間に作者の独自性が表出するのでは無いだろうか、という考えのもとに「絵画」を問い続けながら制作していきます。

前の文章はこの奨学生に応募した際に提出した文章である。

以前、私は大きな画面にも描いていた。絵の具などの物質の重なりにより画面に生じる美しい物質感と画面に残される痕跡、あるいは一回性の表現行為による絵画など、というような偶発的に生じる出来事を追及する造形表現に取り組んでいた。

絵の具の重なりによる物質感とは、建造物の壁のひび割れや染みなど、物質が朽ち果てていくような様子を画面の上でおこなえないだろうか？という思いつきから。それら、見た物をそのまま再現するというよりもその朽ち果てていく様子を画面上で醸成させていくといった表現であり、また、画面に加えるたった一回の偶発的な出来事のために、支持体を替え何度でも繰り返しやり直してみた。それらの表現では、大量の絵の具やセメントなどの物質が使用され、その造形表現行為の結果が眼の前に大量に残されてくる。その先には私の独自となるもの、私らしさと呼ばれるものが存在しているだろうと思い続けていた。しかし、それらの作品たちを眼の前にして、果たしてこの先、このように大きな画面に向かい、大量に物質を取り扱い、同じように何度も繰り返される表現行為により私らしさという独自のものが完成するだろうか？という疑問が生じ、それらの作品について分析する機会を得た。とくに物質に対する問い。

結局、私らしさ、独自性を作り上げるために膨大な時間と、物質とを費やして出来上がった眼の前の作品たちは「空白を空白として描かれた」ものであった。何が描かれたか？という問題はたいして重要ではなく、絵画空間が眼の前で始まり、開かれていく。この事実を確認するだけであった。

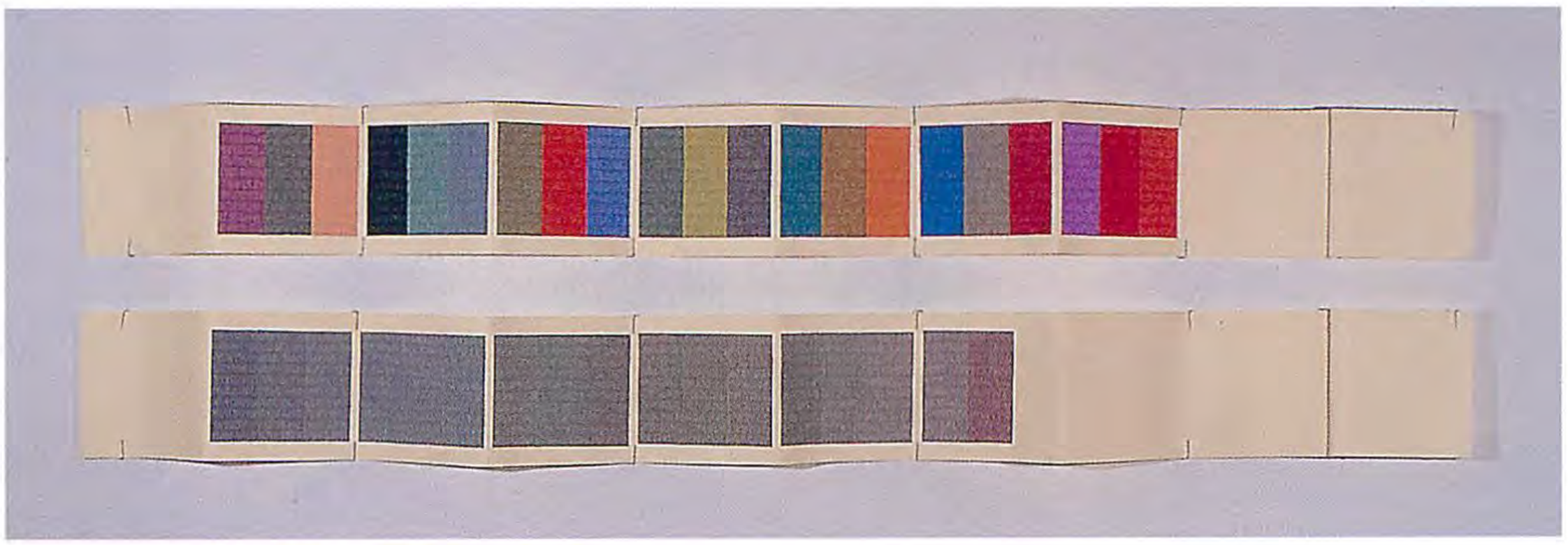
これがこの時の答えらしきものである。

行為、物質などの「絵画」が内包する要素に対する問いがあり、それに対し造形表現行為があり、その造形表現行為に新たな問いが生じ、今の仕事がある。表現や扱う素材は変化しているが、問いとその答えとしての表現行為の関係は今も続いているものである。このような経緯で現在に至り、その取り組んでいる仕事の一つに空白を空白のまま描くことができないか？という問いから発生したものがある。現在の仕事は画面はそれほど大きくない。むしろ小さい。物質感もなるべく無くすように心がけているが、微細ではあるが物質感や手の跡が残ってしまう。均一に塗られた色面上に小さな部位、最大で幅約2ミリ、長さ約15ミリの小さな色面を順番に配列させ一つの色面に広げていく、という制約を設けた方法であり単調な作業である。遠くから離れてその作品を眺めると色面が認識されるだけなのだが、近くによると細かな行為のあとが見て取れる。

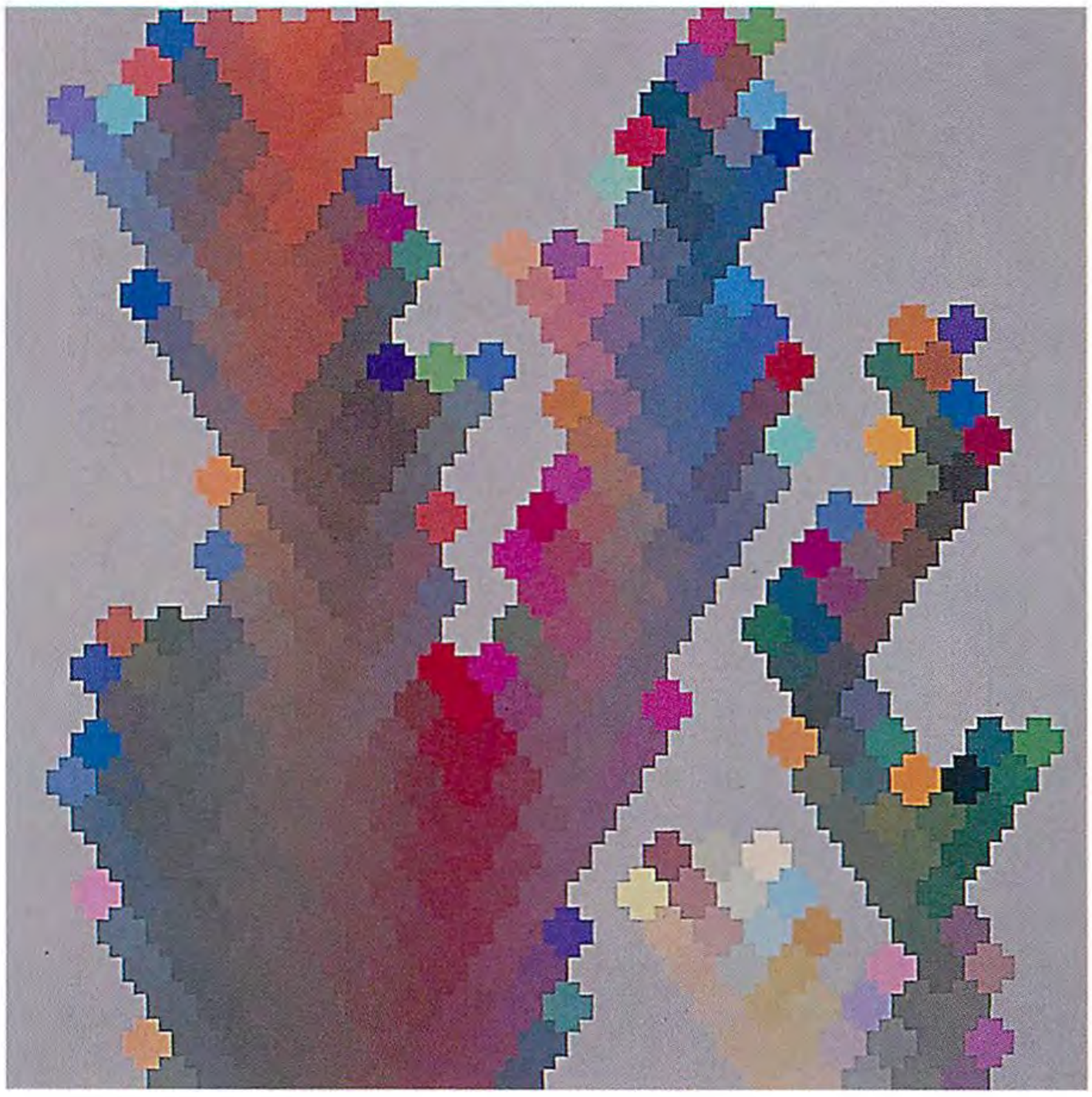
このような制約を設ける作業のなかにも手の技として残されるものがあり、そんな小さな空間の中にも独自性と呼べるものがあるのではないか？と、問いを抱えながら色面をじっくりと時間をかけて色で埋め尽くしている。この問いはこの先もまた新たな問いを生み出すことになるであろう。また、答えらしき物が得られるかが不確定であるが、重要なことは、私の眼の前で自らの手で、単に支持体として存在している物が何らかの空間として開かれていくことであり、私はそれを自分の眼で確認したいのである。

現在取り組んでいること。これから取り組もうと考えていること。

「系図」
「灰色の豊かさ」
「金の絵、銀の絵」



上：色画帖 14（未完）
下：色画帖白から始まる 14（未完）
紙、不透明水彩絵具
各 16.0 × 192.0 ㎝
2007 ～ 2008 年



色彩の系図　2007. No. 1
シナベニヤ、石膏、膠、アクリル
45.5 × 45.5 cm
2007 年



髙橋恒道

1964 年　千葉県生まれ
1990 年　東京藝術大学美術学部絵画科油画卒業
1992 年　東京藝術大学大学院美術研究科修了

個展

1991 年　ギャラリー 21 十葉／東京
1992 年　フタバ画廊／東京
1993 年　ギャラリー睦／千葉
1995 年　ギャラリー 21 十葉／東京
　　横浜ガレリアベリーニの丘ギャラリー／神奈川
1996 年　ギャラリー 21 十葉アネックス／東京
1997 年　ギャラリー 21 十葉アネックス／東京
1998 年　ギャラリー 21 十葉アネックス／東京
2000 年　ギャラリー 21 十葉／東京
2001 年　創ることの視点 -Vol.25　　ギャラリー 21 十葉／東京
2003 年　ギャラリー GAN ／東京

グループ展他

1987 年　5 人展　　東京藝術大学学生会館／東京
1991 年　5 人展　　フタバ画廊／東京
1992 年　「6p」　　目黒区美術館区民ギャラリー／東京
1994 年　第 1 回水彩展「OHARA」　　大原町文化センター／千葉
　　第 23 回現代日本美術展　　東京都美術館／東京
　　北京中央美術学校・北京中央工芸美術学校院・東京藝術大学合同作品展　　福屋／広島
1998 年　GROUP EXHIBITION　　井上画廊／東京（'99）
1999 年　自慢・満足 -Ⅳ　　ギャラリー 21 十葉／東京
2000 年　自慢・満足 -Ⅴ　　ギャラリー 21 十葉／東京
2001 年　自慢・満足 -Ⅵ　　ギャラリー 21 十葉／東京
　　自慢・満足 -Ⅶ　　ギャラリー 21 十葉／東京
　　発生の場 / ドローイング　　東京藝術大学美術館陳列館／東京
2003 年　自慢・満足 -Ⅷ　　ギャラリー 21 十葉／東京
2006 年　「美²」展　　実践女子学園香雪記念資料館展示室 1 ／東京

土屋雅敬

TSUCIYA Masataka

描くこと

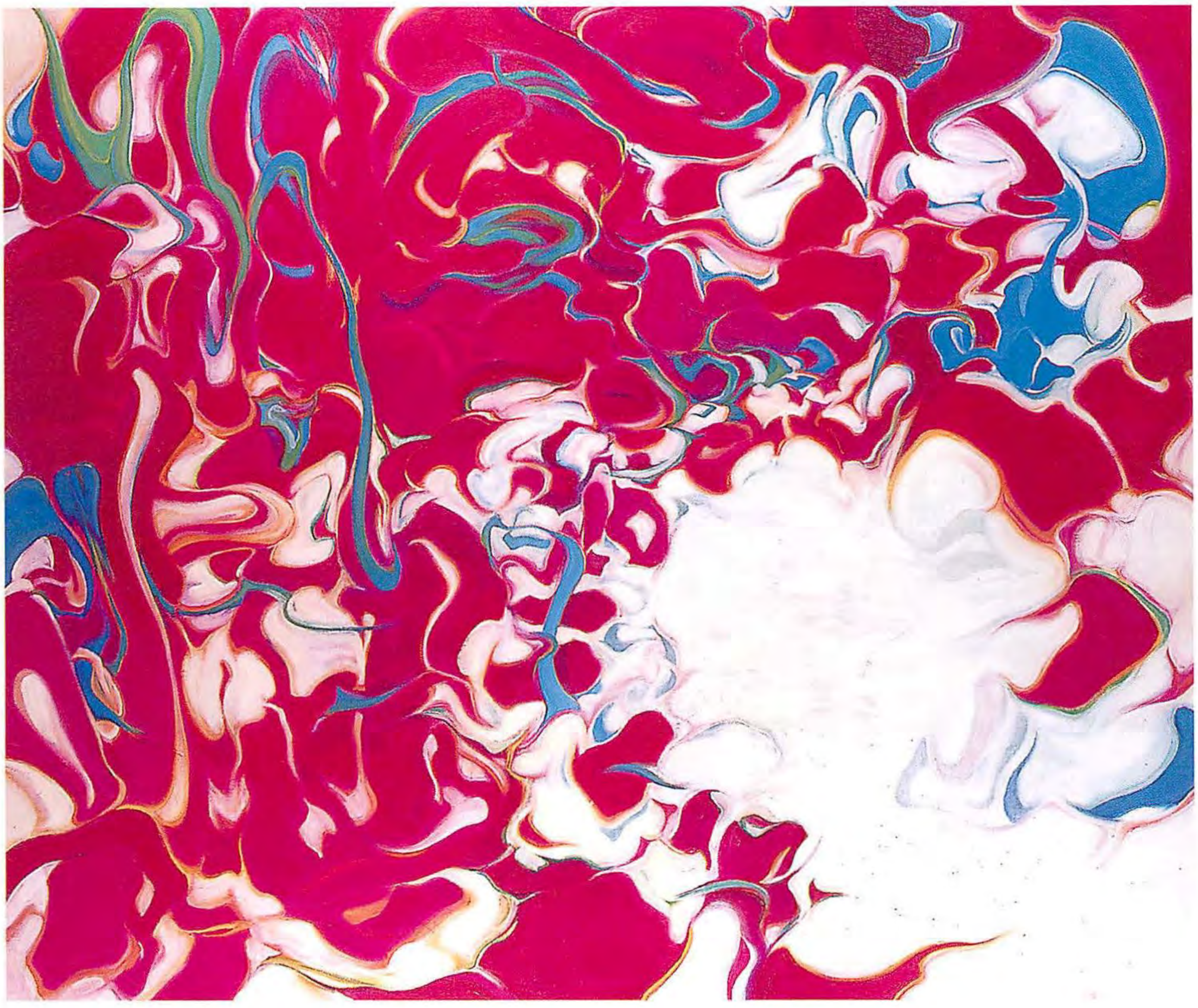
画室のまっさらなキャンバス。
窓から注がれる柔らかい光が微かな陰影を
つくり、画布の肌理を震わせている。その
佇まいに「何か」を描く必要があるのかと
疑念がよぎる。
その白い画布は、未だ手つかずの汚れない
「無」の状態で、それと同時にすでに過不足
なく何もかも満たされているようでもあ
る。
それでもしばらくその前に佇み眺め続けて
いると、そこには本来あるべきものが無
く、無意味さが満ち溢れているように思え
て、居心地を揺さぶる。
その望まれない完璧さを前に、徐々に身体
から枯渇感が沸き上がり、明確な言葉では
捉えがたい希求が私を突き動かし始める。
無という秩序と無意味さで飽和したキャン
バスの揺るがしがたい調和。それを油絵具
で決壊することからしか、その探求を始め
ることはできない。

凡そチューブから絞り出され、絵筆やナイ
フで描かれる油絵具は、キャンバスの上で
色彩を伴った形態へとかたち作られ、何ら
かのイメージとして見い出される。
しかし、油絵具の様相に形象や事象の具体
的なイメージを宛がうのではなく、色彩と
形態で思考の成り立ちそのものを生成する
という行為を、私は希求するのだ。

たとえ、どれ程思案をめぐらし選び出した
一筆でも、キャンバスに放たれた途端そこ
は不均衡な場へと一変する。それでも、そ
の一筆を繰り出さなければならない。
画布の肌理に絵筆を伸びやかに押し拡げる
行為を媒介した油絵具は、胎動するような
振る舞いを見せ始める。その感触と抵抗感
の心地よさを引き換えに、雑多な可能性と
混沌が入れ次から次へとキャンバスの中に導き
いつしか、描くという身体的な繰り返しの
行為によって生成のための離合集散の展開
を繰り拡げた油絵具に、具体的な形象や事
象に到る前の、流れとつながりの秩序を見
い出すことになる。
これこそが私の希求した、まっさらなキャ
ンバスの揺るぎない平衡から、色彩と形態

とそこに係わった私自身の思考の相互作用による動的な均衡への移行、変容過程なのだ。

できるなら、身体から繰り拡げられた筆致が観る者の心的イメージに触れること、そして計り知れない程豊かで深遠な、それでいて都合良く曖昧で不都合に克明な「記憶」にも繋がるものでありたい。さらに願わくは、各々の持つ思考の成り立ちや意識／無意識の領域に係わり得るような絵画を描いてゆきたい。



あとかた - あか・1
キャンバス、油彩
162.0 × 194.0 cm
2007 年
photo by 阿部勇司



あとかた - あか・2
キャンバス、油彩
162.0 × 130.0cm
2007 年
photo by 阿部勇司



土屋雅敬

1973 年　静岡県生まれ
1999 年　多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻卒業

個展

1997 年　O ギャラリー／東京
1999 年　O ギャラリー／東京
2000 年　ギャラリーアートサロンⅡ／千葉
　　O ギャラリー／東京
2002 年　ギャラリーアートサロンⅡ／千葉
2003 年　十一月画廊／東京
2004 年　ギャラリーアートサロンⅡ／千葉
2005 年　O ギャラリー up's ／東京
2006 年　O ギャラリー／東京
　　日仏会館エントランスホール／東京
2007 年　O ギャラリー／東京
　　ギャルリーヴェルジェ／神奈川
2009 年　ギャルリーヴェルジェ／神奈川（相模原市古淵）にて 6 月 9 日～ 27 日迄開催予定

グループ展他

1997 年　富嶽ビエンナーレ展　静岡県立美術館／静岡（'99）
　　神奈川県美術展　神奈川県民ホールギャラリー／神奈川（'98、'01 ～ '05）
　　アート公募 '98 展　新木場 SOKO ギャラリー／東京
1998 年　現代美術ゼミ展　多摩美術大学 1 号館ホール／東京
1999 年　Contemporary Young Painters Exhibition from Japan　Gallery 21 ／ Bangladesh
2001 年　関口芸術基金賞展　柏市民ギャラリー／千葉
2003 年　十一月展 vol.1　十一月画廊／東京
　　美術誕生　八王子市夢美術館／東京
2004 年　REUNITED 展　佐藤美術館／東京（'05）
2006 年　汐留アート塾「公開制作」　汐留シオサイト／東京
　　REUNITED 展　横浜市民ギャラリーあざみ野／神奈川
2007 年　In Motion　O ギャラリー／東京

中井幸子

NAKAI Sachiko

One ～Where are you?～

生きているということは、風景とともにあることだと思います。

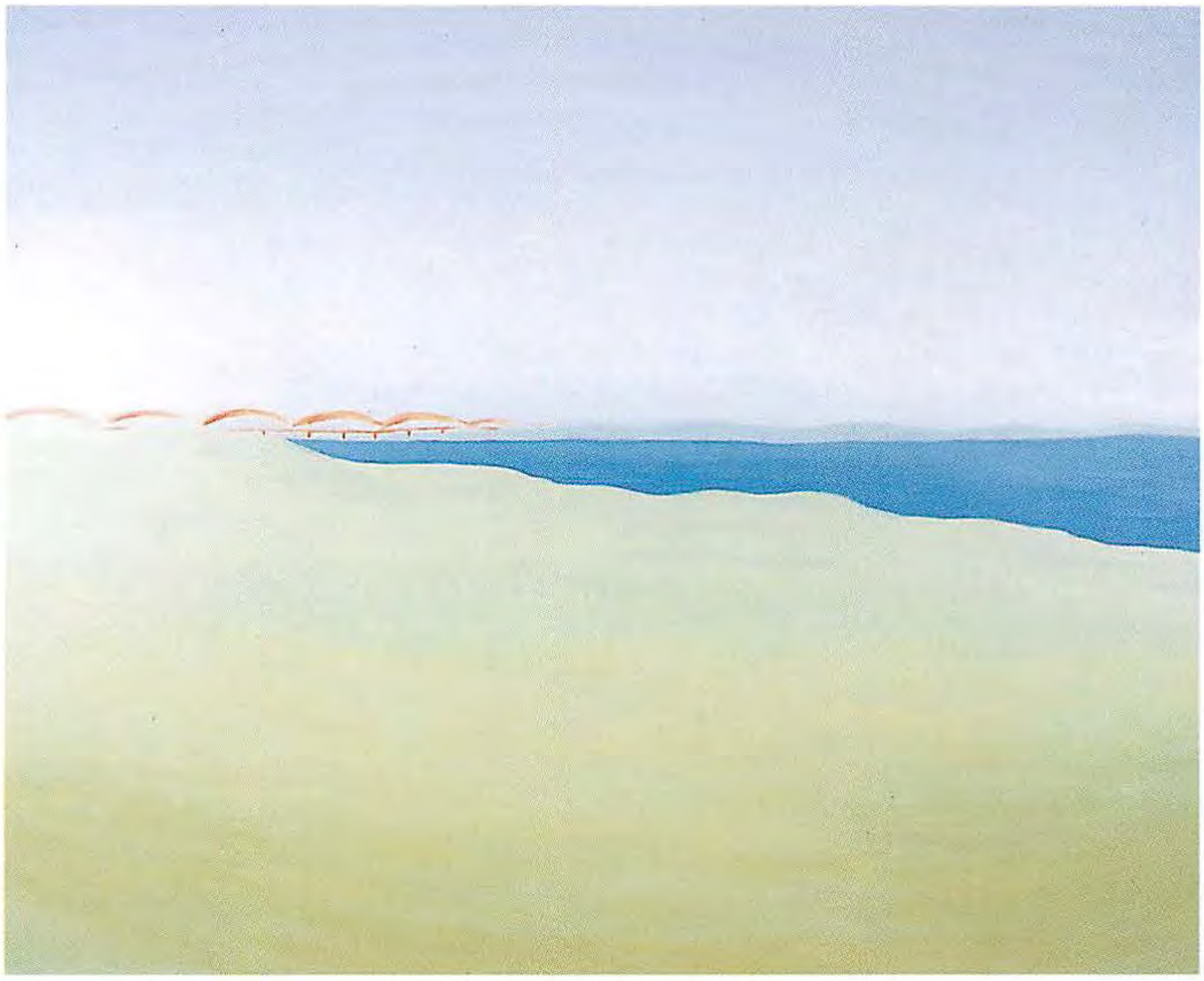
同じ時間や場所ですごしていても、一人ひとりが自身の体で体感するもの、それが風景だと考えています。

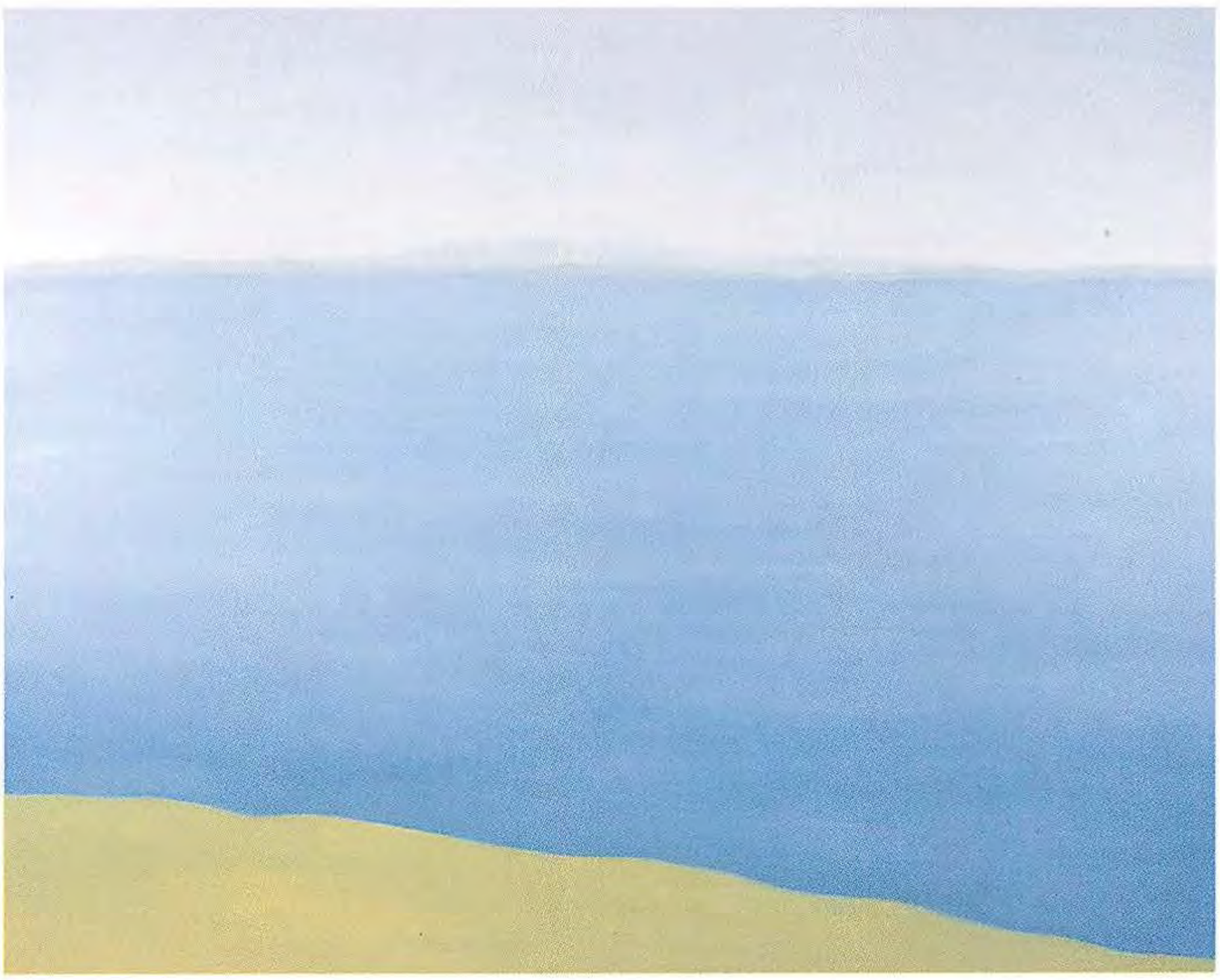
ただ、それぞれが経験してきた時間や場所、そこから感じた風景は違っても、共有できる何かがお互いにあるということが大切ではないかと考えています。たとえ感じた風景が全く同じではなくても、それらはすべて大きな時間の流れのなかでひとつになっていくような気がします。

例えば、私は、私自身が感じた風景をもとに描いています。それをみた人はその人自身が今まで体感してきた風景を思い出したり、感じたりします。そして、お互いに感じていることが作品を介して共有できると思うのです。

タイトルの『One』にはこのような意味をこめています。

ひとつの大きな時間の流れのなかで、みる人に「Where are you?（あなたはどこにいますか？）」と、問いかけることができればと考えています。





上：One ～ where are you?～No. 70
下：One ～ where are you?～No. 71
キャンバス、綿布、油彩
各 130.3 × 162.0 ㎝
2008 年
photo by　清水啓一



展示風景（One ～ where are you?～　No. 69、70、71）
2008 年



中井幸子

1976 年　三重県生まれ
1999 年　京都精華大学美術学部造形学科卒業
2001 年　京都精華大学大学院芸術研究科造形専攻修了

個展
2000 年　Nobody House ／京都
2005 年　ギャラリー白／大阪
2006 年　ギャラリー白 3 ／大阪
2008 年　ギャラリーアスト 1 ／三重

グループ展他
2000 年　日墨現代美術交流展「思」　メキシコ国立自治大学／メキシコ
2004 年　BASE POINTS　アートスペース上三条／奈良
2005 年　A-21 国際美術展　台北國立中正紀念堂／台湾〔中国〕
「現代の証人」展　比良美術館／滋賀
第 22 回天展　天理ビエンナーレ 2005　天理教会本部内／奈良
2006 年　絵画を見る 2006「4 つの窓」展　ギャラリー白 3 ／大阪
Teardrop, My dream 一滴の小さなしずくは…　たんぽぽの家アートセンターHANA／奈良
2007 年　「中井幸子・村井資」二人展　ギャラリー惣門／岩手
Art Link Japan　Craftsmen Gallery 他／フロリダ〔U.S.A.〕
「どこへ向かう？アート」展　比良美術館／滋賀
2008 年　API 2008 展　三重県総合文化センター／三重

永原トミヒロ

NAGAHARA Tomihiro

まちの風景

今、私は自分の住んでいる町、その周辺を歩き、写真に撮り、それを絵にしています。生まれてから一度も離れたことのない町なので、そこに懐かしさは感じません。しかし、改めてカメラを持ち、歩いてみると、自分の全く知らない道や場所に出くわすことも多く、時には新鮮さを感じることがあります。

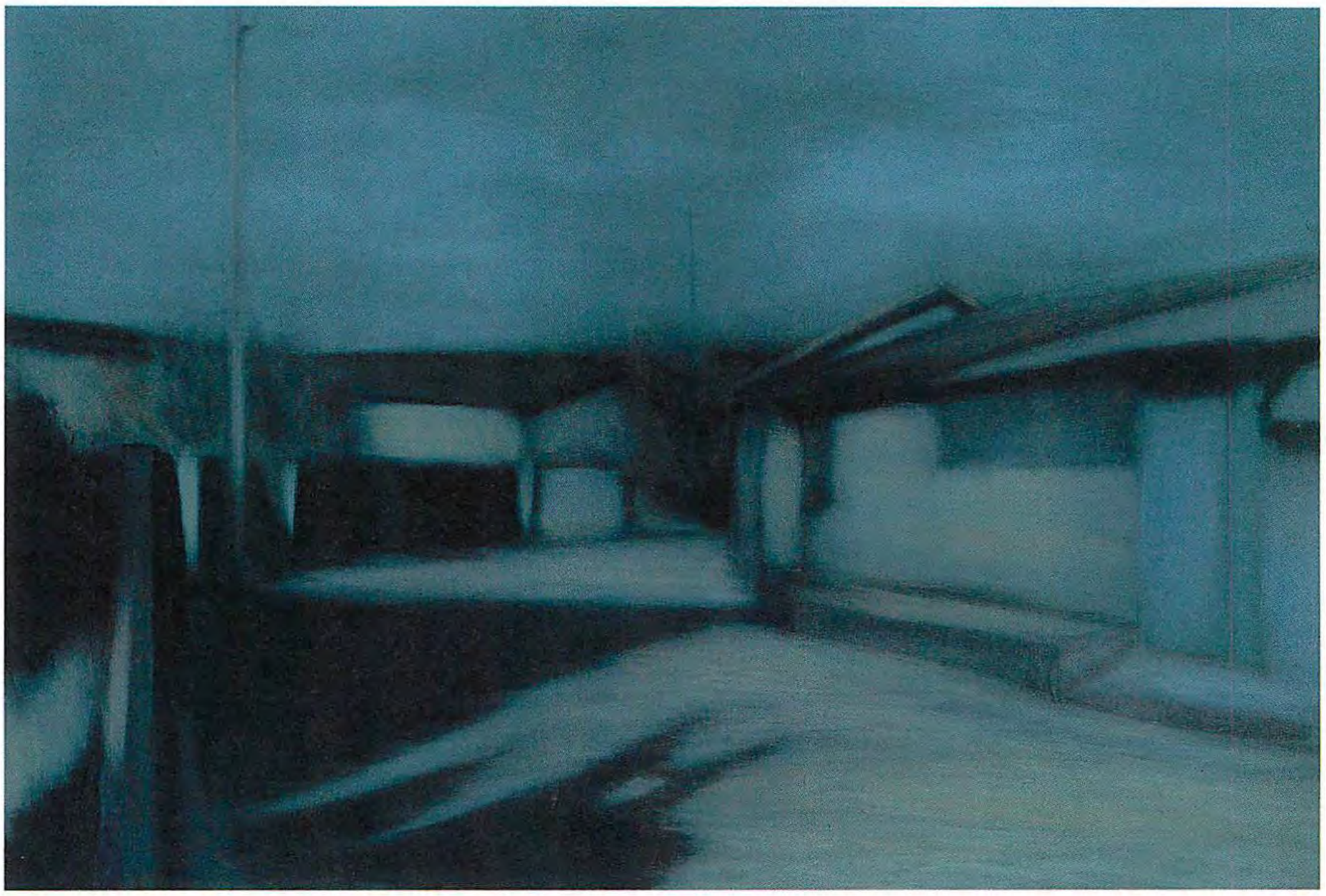
知らない道は、細いほど、この先どこに行くのか、何があるのか不安と興味がつきまといます。そして気付くのが、そこに存在する空気、というか〝におい〟です。細く狭い道を挟み、ひしめき合うように建つ家々。その間を抜けていくとき、そこには淀んだ特有の空気が存在しています。たとえ人の姿は見えなくても、いろいろな音や物、そして〝においい〟からここに生活する人の姿が見えてきます。

家の外に置かれた洗濯機、季節外れに鳴る風鈴、積まれたオモチャ、外からチラチラ見えるテレビ。これらが敏感になった私の感覚を刺激します。

まちの呼吸が私に聞こえてきます。



UNTITLED-08
キャンバス、油彩
194.0 × 130.3 ㎝
2008 年
photo by　末正真礼生



UNTITLED-08
キャンバス、油彩
97.0 × 145.5 ㎝
2008 年
photo by　末正真礼生



永原トミヒロ

1967 年　大阪府生まれ
1990 年　大阪教育大学美術学科卒業

個展

1992 年　ギャラリー View ／大阪
　　ギャラリー Be-Art ／京都
1993 年　信濃橋画廊 5 ／大阪
　　ギャラリー白／大阪
1994 年　ギャラリー白／大阪
1995 年　ギャラリー白／大阪
1996 年　ギャラリー白／大阪
1997 年　ルナミ画廊／東京
　　ギャラリー白／大阪
1998 年　ギャラリーQ／東京
　　ギャラリー白／大阪
1999 年　ローズガーデン EXHIBITION ／兵庫
　　ギャラリー白／大阪
2002 年　シティギャラリー／大阪
　　ギャラリイ K ／東京
2003 年　コバヤシ画廊／東京
　　ギャラリイ K ／東京
2004 年　ギャラリイ K ／東京
2005 年　コバヤシ画廊／東京
2006 年　コバヤシ画廊／東京
2007 年　コバヤシ画廊／東京
2008 年　コバヤシ画廊／東京

グループ展他

1994 年　大阪教育大学 120 周年記念展　大阪教育大学／大阪
1997 年　制度からの逸脱　ギャラリー白／大阪（'98）
2002 年　アートスカラシップ 2001　現代美術賞展　exhibit LIVE ／東京
2004 年　絵画の証 2　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
2005 年　Trend of new realism painting　ギャラリー白／大阪
2006 年　VOCA 展 2006 ―新しい平面の作家たち―　上野の森美術館／東京
2007 年　平成 17-18 年度　文化庁買上優秀美術作品披露展　日本芸術院会館／東京
　　ヘイリ・アジア青年作家プロジェクト　ヘイリ芸術村／ヘイリ〔韓国〕
　　大阪教育大学からの発信―知覚の稜線Ⅱ　海岸通ギャラリー・CASO／大阪

ヒラタシノ

HIRATA Shino

生き物として

私は、人間であっても動物でも生き物の生命力を表現したいのですが、最もけなげなものが植物だと思っています。そして植物の表皮や細胞はあまりに規則的であって複雑です。そのことを念頭に置いてたゆまぬ生の営みとか細胞力をドットで記号化して表すことが多いです。けなげだからこそ、今この入れ物の中で何が起こっているか想像力をかきたてられますが、ある意味自分とは全く異なるものではなく私たち自身を投影している気がします。

私は植物の持つ、艶やかな葉や鮮やかな花が好きです。この艶やかな葉を作るには呆れるほどの単純な過程があったはずです。私達人間が考えても及ばない無限の細胞分裂を彼らは規則的にそして延々と続けてきました。

そして私たちの体の中でも起こっているこの細胞分裂をいかにドラマティックに表現し、幾つかのフィルターから1つの形を作っていく、というのが私の作業の工程です。無意識にも植物をテーマに描くようになってから、ずっとこの単純なことを考え、作品を作り上げるよう試行錯誤しています。

世の中の社会的な動きとはかけ離れたテーマなのかもしれませんが、この普遍的で単純無限なものに向き合い、自分を投影し続けているのです。

近年は自然という果てしなくも驚異的な対象物を描くことを続けています。今後も目に見えない形を作る「うごめくもの」をどう介在させるか、そしてこれがどう影響していくかを確かめたいです。細胞は記憶し、風景を生み出し、私達に何かを還元してくれる、ということを忘れずに。

絵を描くと目に見えないものが見え、ありえない光景が作り出せます。私は、いわゆるこの「イメージ」をいかに具現化させて、この植物たちが持つ割り切れないもの、はまりきらない出来事、そして形としての側面を切り取り、どうにかキャンバスにおさめる、という作業をしていきたいです。



無題
綿布、アクリルガッシュ
116.7 × 91.0 ㎝
2007 年



日本橋３丁目プロジェクト（仮称）
原画：アクリルガッシュ
拡大プリント：高さ３m、全長31.8 m
2007 年
photo by　フォーワードストローク



ヒラタシノ

1974 年　千葉県生まれ
1996 年　女子美術大学芸術学部デザイン科卒業

個展
1999 年　ギャラリーブレス／東京
2002 年　ギャラリーブラックホール／東京
2004 年　ギャラリーブラックホール／東京
2006 年　東京オペラシティアートギャラリー　project N ／ 東京
2008 年　Gallery & dining salon PINOCHIKA ／東京

グループ展他
2002 年　ガーリー展　一周年記念展　　アートギルド／東京（03'）
2004 年　リーディング　ペッパーズギャラリー／東京
2005 年　シェル美術賞展 2005　　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
　　岐阜フラッグアート展　　岐阜神田通り／岐阜
　　FUKUI サムホール美術展　　福井放送会館／福井
2006 年　予兆の地平 2006　　arika art site ／東京
　　荷香・順風　　shanghai shun art & design ／上海〔中国〕
2007 年　VOCA 展 2007 ―新しい平面の作家たち―　　上野の森美術館／東京

［壁画制作他］
2000 年　ベルハートインターネットコミュニケーションズ（非常口等）／東京
2003 年　ラフォーレ原宿（共店舗仮囲い）／東京（'04、'05）
2004 年　ルミネ新宿（店舗仮囲い、地下コンコース）／東京
　　六本木ヒルズ（メトロハットＢ２Ｆ　シャッター）／東京
　　ギャラリーブラックホール（エントランス）／東京
2007 年　横浜ＺＡＩＭ　309 号室／神奈川
　　日本橋３丁目プロジェクト（仮称）／東京
2008 年　リッチモンドホテル熊本新市街　絵画制作／熊本

福村真美

FUKUMURA Mami

風景を描く

風景を描くことは物語を読むのに似ている。

美しいと思った風景（場所）そのものの持つ力をかりて、絵を描き、私は遠くに行ける。

それはさながら物語を読んでいるような感覚だ。

からっぽの私の中に、ある人格が形成されて彼／彼女等と私はどこか遠くへ行く。

風景そのものをうつしながら、絵の具を置く時点で、それは風景ではなく、別の何かにかわる。

風景に似ている何か。

そのものをつくろうとするのではなく、そのものに似た何かをつくる。

この〝ずれ〟が楽しくて、ずっと実在する風景（実際そこに行ったか、行って無いかは別として）を描いてきた。

そしてその〝ずれ〟は絵を見た人の中でも起こる。

たとえば、私が庭の絵を描くとする。

絵を見た人は、私の見た庭とは違う庭を頭に思い浮かべるかもしれない。

それは一枚の絵を通して、ひとつの庭がいくつもの庭にもなりえるということ。

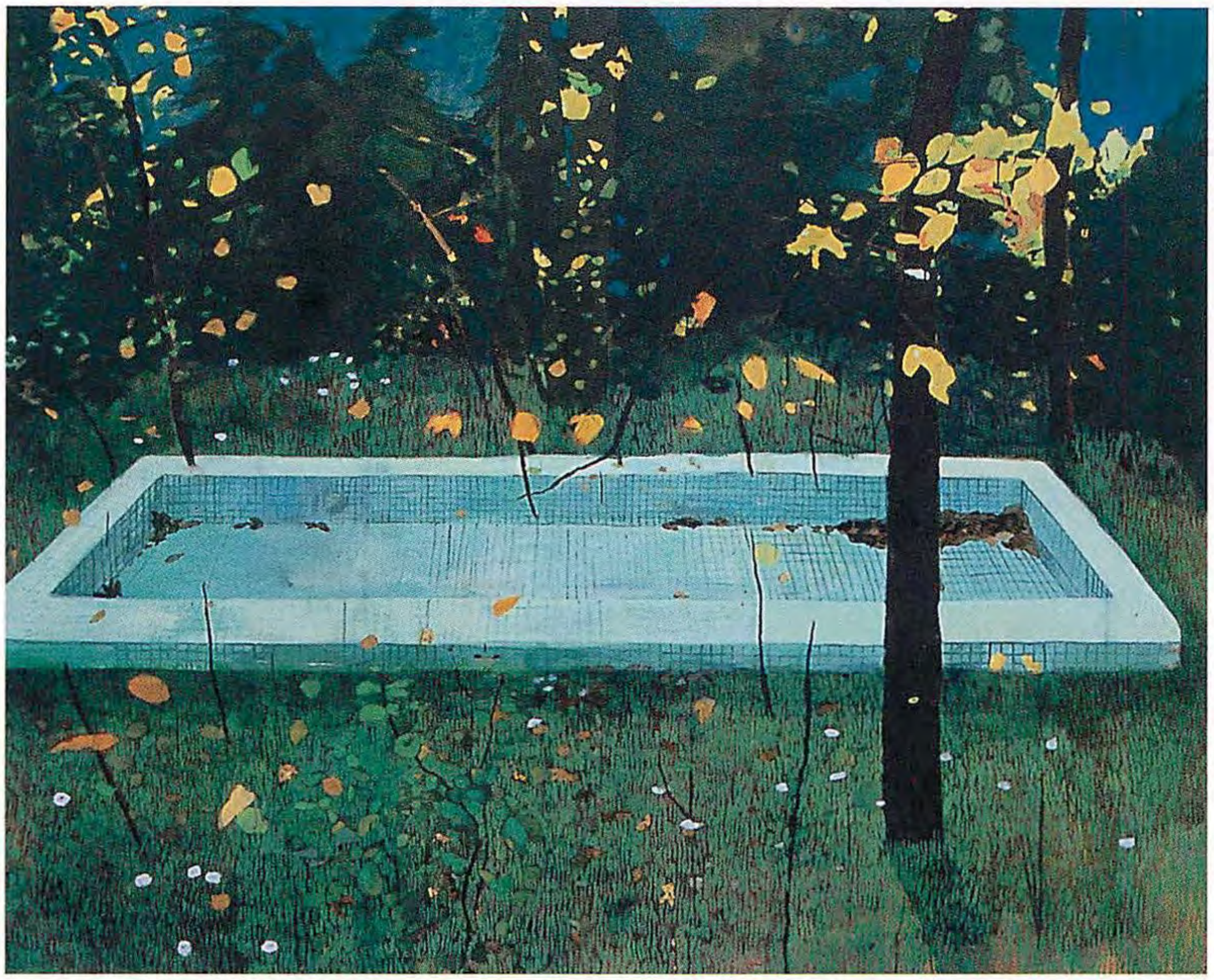
私自身、絵を見るときはその感覚を楽しんでいて、たくさんの本を貪り読むように、風景を見て絵を描き、また、他人の描いた絵（ある人格が通るフィルターを通して見た世界に似ている何か）を見る。

風景のもつ力をかりた私の絵が、今度は絵を見た人をどこか遠くに連れて行くことがあるかもしれない。

その流れのつながりを見ている。



ワルツ
キャンバス、アクリル、油彩
61.0 × 72.0 cm
2007 年



庭
キャンバス、アクリル、油彩、金箔
181.0 × 227.0 ㎝
2007 年



福村真美

1982 年　滋賀県生まれ
2004 年　京都市立芸術大学美術学部美術科卒業
2006 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了

個展
2007 年　ギャラリー唐橋／滋賀
2008 年　前田珈琲／京都
立体ギャラリー射手座／京都（中京区）にて 9 月 30 日～ 10 月 5 日迄開催予定

グループ展他
2003 年　主と客　同時代ギャラリー／京都
2004 年　まばたきフォーカス　プランタンビル／沖縄
2005 年　おでかけ美術　岐阜駅ビル／岐阜
various interests　京都市立芸術大学／京都
FRAME　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
藝術家の線　石田大成社／京都
2006 年　第 1 回全国公募絵画展　ビエンナーレうしく／茨城
P&E　Art Court Gallery ／大阪
2007 年　京展　京都市美術館／京都

前田朋子

MAEDA Tomoko

彼女の顔、光の下

たくさんのものに囲まれ、情報の氾濫する現代。何かを見つめ判断することが非常に難しく困難なこの時代でも不変的なものはあるだろう。

私の制作はまず写真を撮影することから始まる。写真は現実の世界を均一に写し取ります。写真を撮影しプリントアウトしたものをトリミングして、それをパネルに油彩で拡大して描いていく。写真はどれほど抽象化したものであれ、どこかに現実の断片を必ず含みます。被写体の一部を、普段は記憶に残らない何かに気付くように故意に切り取ることによって、たとえそれが見慣れた光景であっても、移ろいゆく現実のなかでは常に振動するということに気付かされる。

ディテールが抜け落ち、輪郭がぼやけ、形の情報が曖昧になることで画面は色彩に支配され、そこには現実の世界ではなく、見る人の記憶や経験に呼応能動的な「みる」を映し出すことになるのではないでしょうか。

今回は映画のワンシーンをモチーフに描きました。映画をみているとフィクションの中に潜む現実が見えることがあります。描かれた彼女達には顔はなく、その視線の行き先は画面の外に存在します。暗闇の中で浮かび上がるその後ろ姿は、観る者の不在を意味するかのようです。女の肖像をみるとき、鑑賞者は彼女の瞬間を留めた姿をみると同時に、自身の考えを知ることになります。顔を持たない彼女達は、フィクションの中で活きています。どこに住み何をみつめ暮らしているのでしょう。多種多様な生き方の中でいったいあなたは何を選択するのでしょうか。

そしてもう一方は不在の風景です。遥か上空の飛行機の窓から撮られた空、霧深い山中、暗闇に光輝くひかりの粒…。虚ろいやすい現代はＴＶやインターネット、雑誌や新聞などの様々なメディアを通して私達を「風景」が取り巻いている。

揺れ続ける現実を見つめる目を持つ作品を描きたいと考えています。



光の下　01
パネル、油彩
90.8 × 90.8 cm
2007 年



霧の中
パネル、油彩
90.8 × 90.8 ㎝
2007 年



前田朋子

1975 年　大阪府生まれ
1999 年　京都精華大学美術学部造形学科洋画専攻卒業
2001 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了

個展

2003 年　appearance　GALLERY wks. ／大阪
over there　エスプリ・ヌーボー／岡山
2005 年　雪景　Gallery Yamaguchi Kunst - Bau ／大阪
マインド・ボディ　ZEIT-FOTO SALON ／東京
2006 年　身勝手な記憶　エスプリ・ヌーボー／岡山
闇と空と白い花　第一生命南ギャラリー ／東京
2007 年　彼女の顔／空の下　東京日本橋髙島屋美術画廊 X ／東京

グループ展他

2001 年　Nomart Project 2001 ーイメージ・オン・イメージ　ノマルエディション / プロジェクト・スペース／大阪
みることについて　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
PRIMART　STATEMENT　O ギャラリー eyes ／大阪
2002 年　EMERGE　エスプリ・ヌーボー／岡山
2003 年　イメージの新様態 XIII - Zoom & Focus -　ギャラリーすずき／京都
2004 年　DELICACY　エスプリ・ヌーボー／岡山
VOCA 展 2004 ー新しい平面の作家たちー　上野の森美術館／東京
フラット　プラット　神奈川県民ホールギャラリー／神奈川、海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
Premonition - P　大阪成蹊大学芸術学部 Space B ／京都
2005 年　City net _ Asia 2005　ソウル市美術館／ソウル〔韓国〕
2006 年　VOCA に映し出された現在 - いまいるところ / いまあるわたし -　宇都宮美術館／栃木
2007 年　ヘイリ・アジア青年作家プロジェクト　ヘイリ芸術村／ヘイリ〔韓国〕
JAMIN　エスプリ・ヌーボー／岡山
I meet･･･　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
2008 年　Chinese and Japanese Contemporary Paintings from Zeit-Foto Collection　上海美術館／上海〔中国〕

三原奈津子

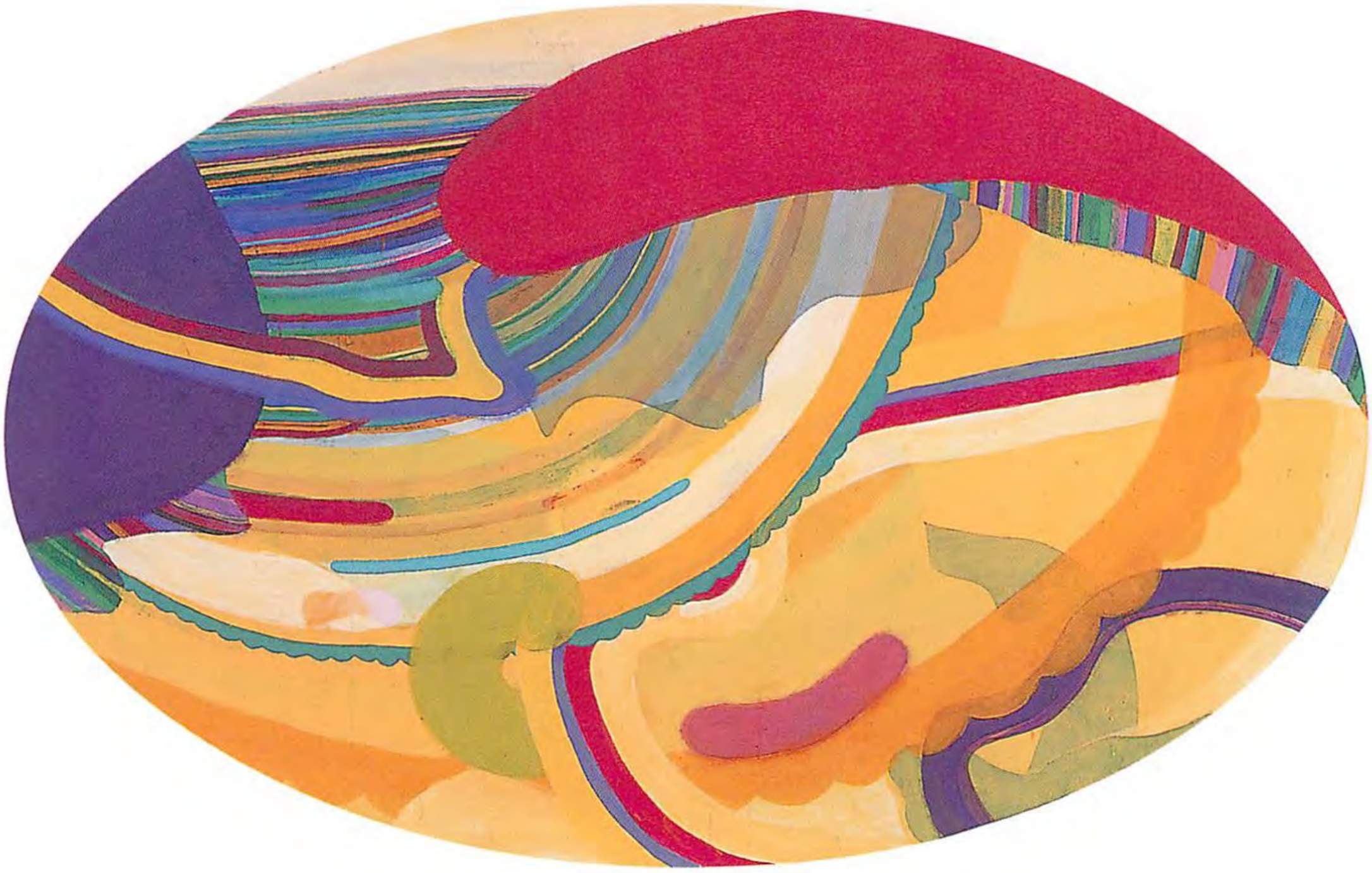
MIHARA Natsuko

大切な時間を心の中にしまう。
色褪せてしまう前に、そっとしまう。

「時間はただの記憶でしかない」と何かの本で読んだことがある。
私はこの一節に動揺した。自分が懸命に生きていることも、大切な人々も、愛しいものたちも、全てすり抜けて失ってしまうように思えたからだ。私はこの日以来、失いたくないものを、自分の中に注意深く集めるようになった。
日々さまざまなものが、私の中に積み上げられていく。失いたくないものが溢れることで、地面に縛り付けられているような気持ちになることがある。全てを放棄してふわふわとしていたいと思う時もある。
しかし、これらを放棄することは自身を形づくる破片を手放すことと同じ意味である。だから、私は日々増え続ける愛しいものたちを守り、育むため、形にすることにした。
私にとって作品をつくることは、守りたいものへ責任を果たす意味であり、自分自身の本質を再認識する行為でもある。



DOUBLE TONGUE
木、断熱材、石膏、寒冷紗、アクリル
194.0 × 130.0 × 15.0 ㎝
2007 年
photo by　村田　眞



SUNNY BEACH
木、寒冷紗、石膏、ウレタン、アクリル
125.0 × 200.0 ㎝
2007 年
photo by　村田　眞



三原奈津子

1982 年　北海道生まれ
2005 年　女子美術大学絵画学科洋画専攻卒業
2007 年　女子美術大学大学院美術研究科美術専攻修了

グループ展他

2003 年　ひょっこり展　　ギャラリー日比谷／東京（'04、'05）
2005 年　第 41 回神奈川県美術展　　神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
2006 年　女子美術大学大学院 1 年生学外展　　ギャラリー青羅／東京
　　第 41 回神奈川県美術展 大賞受賞作家展　　神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
2007 年　女子美術大学大学院 2 年生学外展　　ギャラリー青羅／東京
　　女子美術大学学生作品展 - 女子美美術館所蔵作品賞受賞作品を中心に -　　横浜市民ギャラリー／神奈川
2008 年　「拝啓、個人研究室より」　　ギャラリーアニータ／神奈川
　　routine feeling X fantastic feeling　　ギャラリー日比谷／東京

三森早苗

MIMORI Sanae

みるものすべて？あるものすべて？

日頃、人は何処を、何を視ているのだろう。風景の一部を、自らの一部を、相手の一部を、いや、全体を？

在るものすべてを、視ることなどありえないのか？

視るものすべてが、在るものなのか？

そんなことを考えつくられたものは、私の視た一部だろうか？全体だろうか？

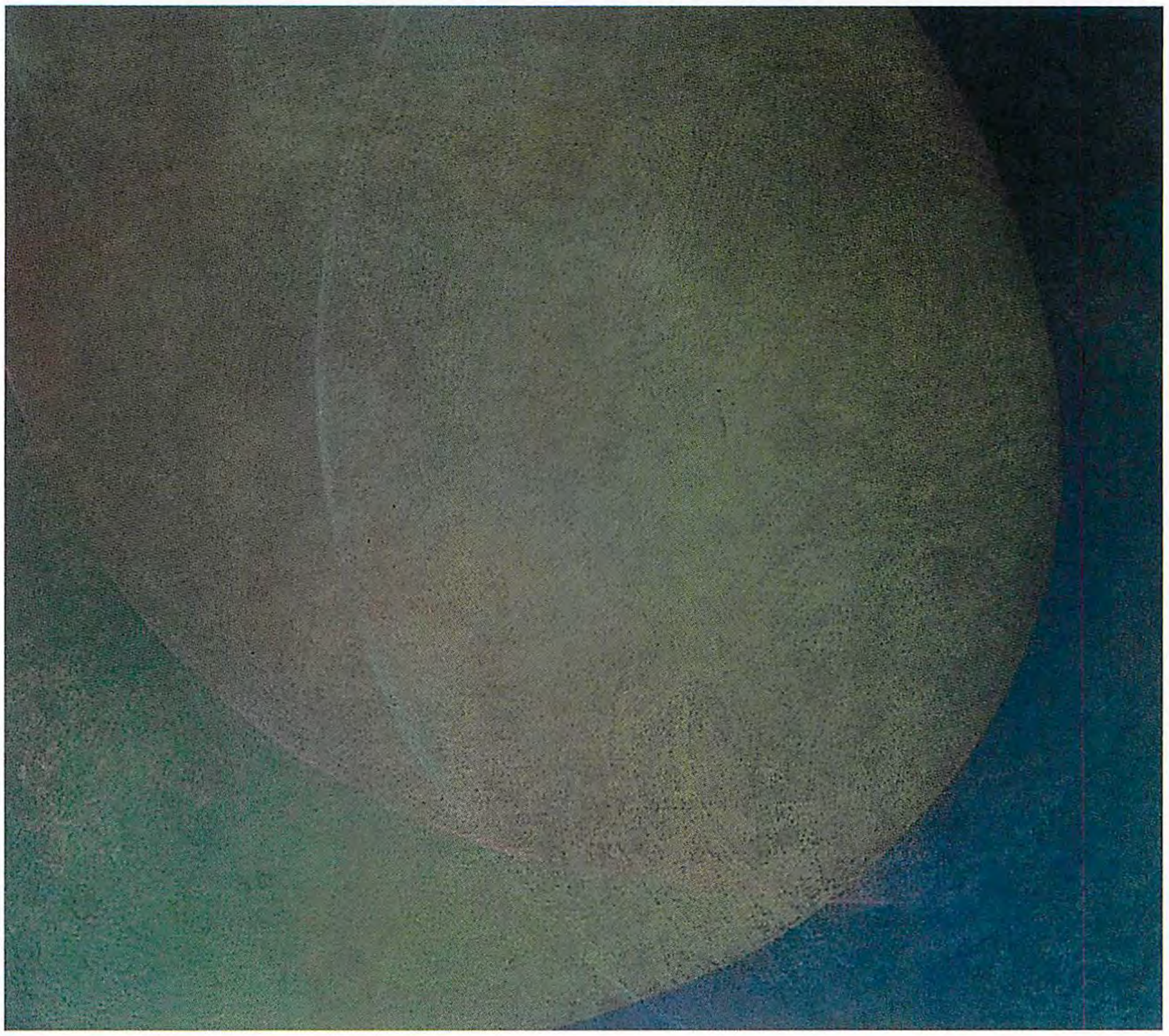
果たして、それは存在するものなのだろうか？

見る人により、それは、また切り取られていく。

一部となり、また、全体となるのだろうか？

日常、視ている、在ると思うものを、あらためて考える空間に作品がなることを願い、線の軌跡を重ねる。

一瞬近づき、一瞬遠のく線の軌跡が集まり、空間が生まれ、と同時に線の軌跡が消えるまで、視続け、描き続けられたらと思う。



みるものすべて？あるものすべて
羊毛、パルプ、色鉛筆、他
111.0 × 126.0 ㎝
2008 年



空をうける（展示風景）
羊毛、パルプ、色鉛筆、他
右：180.0 × 225.0 ㎝
左：180.0 × 180.0 ㎝
半球：各 Φ約 62.0 ㎝
2007 年(一部加筆）



三森早苗

1967年　茨城県生まれ
1990年　武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業
1992年　武蔵野美術大学大学院造形研究科修了

個展

1993年　静寂のある空間　　ガーディアン・ガーデン／東京
1997年　聴こえてきたことがある　　ギャラリー伝／東京
1998年　聴こえてきたことがある　　T.Y.HARBOR BREWERY ART SPACES／東京
1999年　聴こえてきたことがある　　小野画廊／東京
　　Through　　Gallery ART SPACE／東京
　　Through　　Gallery B－one／東京
2000年　それは空箱のような　　G-ART GALLERY／東京
2001年　青に会う　　ギャラリーカフェくりっく／東京
　　青に会う　　世田谷区情報センター生活工房 情報プラザギャラリー／東京
2002年　空気のつぶの色　　GALERIE SOL／東京
　　青に会う　　玉川高島屋SC南館ロビーボックス／東京
2003年　見えざるものの　　GALERIE SOL／東京
2004年　ポケットに空気　　GALERIE SOL／東京
2006年　空をうける　　ギャラリーブリキ星／東京
　　みるものすべて？あるものすべて？　　GALERIE SOL／東京
2008年　ギャラリーブリキ星／東京（西荻窪）にて9月24日～10月2日迄開催予定

グループ展他

1990年　TWO WOMEN SHOW　　ギャラリーNW-house／東京
　　Art Festival MITO　　水戸芸術館現代美術センター／茨城
1991年　TODAY'S ART TEXTILE　　東京テキスタイルフォーラム／東京（'03）
　　UNTITLED　　ガーディアン・ガーディアン／東京
　　移動する遊体～雑誌かたち主催～　　小原流会館／東京
1992年　15th INTERNATIONAL LAUSANNE BIENNIAL CONTEMPORARY TEXTILE ART　　Musee cautonal des beaux arts／Lausanne〔スイス〕
1993年　15th INTERNATIONAL LAUSANNE BIENNIAL CONTEMPORARY TEXTILE ART　巡回展（選抜）　　Nederland Textilemuseum／Tilburg〔オランダ〕、Nordgjyllandskunsutmuseum／Aalborg〔デンマーク〕
　　TODAY'S ART TEXTILE　　千疋屋ギャラリー／東京
1994年　TODAY'S ART TEXTILE　　ギャラリー無有／京都
　　INDIVIDUAL OF TEXTILE　　目黒区美術館区民ギャラリー／東京
1995年　かたちなきかたち　　目黒区美術館区民ギャラリー／東京
1999年　織と紙の二人展　　ギャラリー蔵／長野
2000年　田中秀穂が選んだ新進作家展　　千疋屋ギャラリー／東京
2001年　MINIAR TEXTIL COMO　　Chiesa di San Francesco／Como〔イタリア〕、他（'05）
2002年　TODAY'S ART TEXTILE　　ギャラリー彩園子／岩手
　　TODAY'S ART TEXTILE　MA展　　MAギャラリー／福岡
　　そばあーとフェスティバル　　満留賀／東京
　　Korea International Art Fair　　BEXCO／釜山〔韓国〕
2003年　another sight ～視えざる世界の情景～　　Gallery ART SPACE／東京
　　TRACE展　　GALERIE SOL／東京
2006年　Aus Papier　　Handwerksform Hannover／Hannover〔ドイツ〕
2007年　ECO×DESIGN　日本のクリエーター300人によるエコグッズデザイン展　　上海当代芸術館／上海〔中国〕

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊 2008

発行日　2008 年 6 月 30 日発行
定　価　1,000 円（本体 953 円）
発行所　ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋 2-18-4
発行人　吉村信夫
編　集　倉田妙子

holbein